
デスティニーな兄

六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デステイニーな兄

【Nコード】

N7546Z

【作者名】

六

【あらすじ】

最早物語は終わり、そして皆は明日へと歩き始める。

それぞれの歩みはあるだろうけれど、それでも歩む先の道が混じっている事を信じながら。

切っ掛けとなった人物は織斑万春。織斑三兄妹の長男。またの名をラストサムライ。

どこかへと消えてしまった彼を知るため、彼女もまた歩み始める。

IS学園一学年担当学年主任

織斑千冬（前書き）

メリークリスマス。

これが六のクリスマスプレゼントです。

兄さんのことか。ああ、よく覚えてる。

目蓋を閉じなくてもはつきりと、刀を揮うあの姿が目には焼きついているぞ。

それで、お前は兄さんの何を聞きたいんだ？

ふむ、思い出、か。

しかし、あまりお前が期待できるものなんてないだろう。いや、決して兄さんと私の仲が良くなかった、というわけではない。寧ろ私たちは昔からずっと仲がよかったな。ただお前が望むような珍しい過去なんて私たちにはなかった。それだけさ。それでも聞きたいか？

……よし、ならば少しかけてやろう。
織斑万春おりむらばんしゅんという男の過去を。

ふん、身構えなくてもいい。それほど面白くもない話だしな。

取り合えず、お前も知っているだろうが私たち兄妹が両親に捨てられてからのことでも話すか。一夏は覚えていないだろうが、両親は私たちを大事にしていた。それこそ普通の家族だった。少なくとも仲は良かったと言えるだろう。特筆する事もない、ただの家族だ。

しかし、ある日忽然とあの人たちが私たちの前から消えてからそれも変わった。

中でも兄さんはすぐさま仕事を始めたな。あの人たちがいなくなった次の日から、兄さんは篠ノ之柳韻さんの紹介で仕事をしていた。だからこそあの頃私たち兄妹は食い扶持を繋げる事ができたが、その時は兄さんはどのような仕事をしていたのか、あまり話してくれなかったな……。

ただ、私たちに知ってほしくなかったのだろう。あの人は自分が苦しい時や辛い時、それに悲しい時ほど気丈に振る舞い自分の事を隠すのが上手かったからな。……兄さんがそういう人間だと気づいたのは、それこそずっと後の話しになるが。

話を戻すぞ。働き出した兄さんだったが、あのひとはそれでも剣をやめなかった。いや、やめられなかったと言う方が正しいか。

兄さんはいつだって『俺にや剣しか取り得がねえんだ』と笑いながら言っていたが、あれは正鵠を得ていた。それほどまでに兄さん

は剣にのめり込んでいた。だからこそ篠ノ之流剣術を習った果てに、兄さんは独自の研鑽を積んで自分の剣を手に入れようとしていた。

ああ、その通りだ。普通は自分の剣など持つべくもない。新たな流派を生み出すようなものだからな。

……ただ、兄さんには才能があった。剣士としての才能が。刀に愛される才能がありすぎた。

私は兄さんの後で道場に通い始めたからわからなかったが、道場には篠ノ之柳韻さんとともに打ち合える人は兄さんしかいなかった。いや、打ち合うと言うのは違うな。篠ノ之柳韻さんだけがまともに兄さんと『斬り合える』人だった。

兄さんはおかしな人でな。竹刀だろうか、木刀だろうか一度斬られてしまえば負けという考えを持っていた。それこそ半端な形で入ったものでも負けたと勝負を降りていた。ふふ……潔いなんて立派なもんじゃない。あの人は頑固で勝ちたがりなんだ。だからこそ信念を決して曲げず、最後まで己の矜持を貫き通していた。剣であるうが、ISであろうが、だ。

そんなあの人だったからだろうが、剣の腕は天井知らずだった。すぐさま柳韻さんを越えていったよ。もう道場では誰も兄さんの相手が出来なくなった。私も含めてな。免許皆伝の称号を僅か十代の子供が与えられたのだ、それほどの腕だった。だからこそ、今度は

自分で腕を磨き模索するしか道は残されていなかった。

苦しそうだったぞ、あれは。普段明るい兄さんがそれを隠しもせずに汗水流して顔を歪ませながら、延々と剣を振っているんだ。……正直、見てられないと思ったさ。けどな『くはは、恥ずかしいところ見せちまったな』と兄さんは私に気づいて言ったが、あれほど美しい時を、私は知らん。無骨で泥臭くて、惨めにも程があったが、懸命に己へと問いかけて一心に剣と向き合う兄さんは、……そうだな、かつこよかった。

だからこそ、私は兄さんの助けになりたいと思った。兄さんがいなければ私はもつと余裕のない人間になっていただろう。だが、兄さんがいたからこそ私は中学高校に通えていたし、一夏だってそうだ。私たちは兄さんがいなければまともな生活さえ送れなかった可能性がある。もしかしたら離れ離れになるかもしれない。だから私は兄さんに感謝して、人としても家族としても、そして剣士としても女としても懂れていた。

うん？　好きだったのかだって？

はは、……そうだな。私は兄さんが好きだ。……うん？　おかしな事ではないだろう。何て言っただって家族だしな。

けどな、お前にもわかるかもしれないが、あれほど優良物件な男なかないぞ。

顔も整っているし、腕っ節も凄まじい。私と違って気さくで、更に経済力もあった。

……それに、あの人は『世界で始めてISを動かした男』だ。兄さんのネームバリューはそんな所これらの男では太刀打ち出来ぬものだったし、一夏がISを動かせると発覚するまで『世界で唯一ISを動かせる男』として業界の最前線を無敗で駆け抜けた人だぞ。あの頃、兄さん目当ての追っ掛けは男女問わず凄絶だった。そう言えば公式戦には必ず駆けつけ、移動のルートさえも押さえるような莫迦もいたな。つまりはだ、あの人以上の男なんているはずないさ。

……ブラコンではない。事実を述べただけだ。

どこまで話したかな。……ああ、兄さんの腕だったか。お前も知っている通り、あの人は剣士としての信念に基づき、清々しいまでに己の剣を手に入れた。どうやってか、と聞くな。あまりに無粋だ。……それに、言葉にしたって理解は出来ないだろう。ならばこそ、実際に兄さんの剣を見たほうが早い。お前も見えてきたはずだ。兄さんの太刀筋を。……だからこそ、言葉は不要だ。

事実、私は兄さんの剣術をともに理解する事が出来なかった。ああいうのは見ただけではわかるはずもないんだ。だから少なくとも、モント・ケロッシン第一回IS世界大会格闘部門決勝戦で兄さんと戦うまで、私は兄さんが高め続けた剣の極致を把握する事ができなかった。

ああ、そうだ。お前の知っている通り、兄さんはあのモンド・グロツソで一度も被弾せずに戦い、しかもISの特性を殆ど使用せずに勝利を収め続けた。ハイパーセンサーやスラスターぐらいか？あの時使っていたのは。

更に兄さんは決勝戦で私と戦うまで、一度も地上から足を離さずに勝利してきた。……ああ、まともではない。

結果は知つてのとおり、私の負けだった。

けれどな、気持ちよく私は負けたのさ。

……負けたのに気持ちが良いなんておかしいって？確かに、お前にはわからんだろうな。いや、馬鹿にしたのではない。兄さんは剣士として私と戦い、私は剣士として兄さんに挑んだ。ただそれだけさ。それだけの事さ。……ただ、それが私には嬉しくてな。

研ぎ澄まされたものというのは実用性と共に芸術性さえ兼ね添えるが、兄さんのあれは違った。兄さんはあくまで剣士で、それ以外を認めはしなかったのさ。だから兄さんは自身のIS『灰鶴』を纏いながら剣士としての自らでもって在り続けた。

あの時受けた太刀筋は、今も覚えてる。あまりに鋭く、あまりに疾い一撃が空を切り裂きながら私の首を狙い、それを受け止めようとすれば、いつの間にか私は斬られようとしている。

兄さんの対戦者だった相手の殆ど？気づけば斬られ、いつの間にか負けていた？と口を揃えて言っていたが、あれはそういう次元だった。

剣は自身の担い手である剣士を語るのさ。濃密な時間をかけられて練り上げた拳動、理合。ただ無作為に揮われた一筋の太刀が人生を物語る。だからこそ、私は兄さんのそれを受けられる事と、兄さんに全てを曝け出せたあの瞬間が忘れられない。無論、忘れたくない。

少なくとも、モンド・グロツソで兄さんに負けた相手には悪いが、私は兄さんの太刀筋を理解できたし、更に一度だけだが兄さんを空へと飛ばした。あれだけでも私には誇りさ。

だから、私はブラコンではない。……次はないぞ、わかったな？

……結局、剣士としての兄さんに敵う者もなく、兄さんは格闘部門優勝者となり、私は総合優勝を果たしブリュンヒルデなどと呼ばれるようになった。

ああ、あの試合だけだな、私が敗北したのは。兄さんが他の競技にも興味を持てば、どうなっていたかわからないが、兄さんは格闘部門しか出ていなかったしな。

当然だ、私が兄さん以外に負けるはずがないだろう？

ふっ、そういえばお前は知っているか？ 兄さんが格闘部門で優勝した後、兄さんにどのような称号が与えられるか、少しもめてな。

結局、兄さんの試合を見た一般市民が兄さんを最後の侍と呼び始めてから、兄さんの称号はラストサムライとなったんだ。
ラストサムライ

……似合わないと思うか。確かに、似合わないし、私も似合わないと思った。だけど、兄さんはあれを思いのほか気に入っていてな。あの人は時代劇とか大河ドラマが好きだったからな。なんだか可愛らしかったよ。

……ほう、何か言いたいような顔をしているな。

……そうだ、世界は女尊男卑だ。兄さんの活躍はなかなか物議を醸していた。特に時の風潮に便乗した莫迦どもがな、いらぬ疑いをかけて兄さんを邪険にした時など、思い出すのも腹立たしい。今でも腸が煮えくり返る。……まあ、そいつらも時機に黙らざるを得なくなっただけだな。

しかし、予想外な事に兄さんは世の男たちに受け入れられた。

恐らくだが、彼らは兄さんを世界で唯一の男性IS操縦者としてではなく、ただのもののふとして受け入れたのだろう。事実、調査によれば、兄さんが優勝した後子供の剣道部志願者が増加したという報告もある。一夏も剣道をやる奴が増えたと嬉しそうに言ったな。

理由、はある。兄さんがISの特性を殆ど使用せず、ただ剣士としての力量のみで戦っていたからだ。

……納得のいかない顔をしているな。

確かにそれだけが理由というのは、おかしい話だがな。

だが、男性唯一のIS操縦者という立場上、兄さんは男に恨まれるはずだった。お前にはわからないだろうが、女尊男卑の煽りを受けた世の男性はISに良い感情を持っていない。

ISが配備されて職を失ったものの、女の理不尽な物言いに嵌められたもの、そしてそれを許す社会。男よりも女が優秀である、と根拠のない持論を展開して悦に浸る阿呆もいる。男が今の世を恨み、

憎むのは当然だった。そこに現われたのが兄さんだ。

……兄さんは剣士だった。あの人は剣士としてあり続け、剣士として障害を切り裂き続けた。

ISを纏いながら、己の剣士としての技量のみを駆使し、そして優勝した。

だからこそ、世の男性は兄さんを受け入れたのだと思う。これがISという兵器を使用する男だったら、女からも男からも排斥されるのがおちだ。

そんな兄さんだから、第二回モンド・グロツソには特別招待者として呼ばれた。

ああ、お前も知ってるのか。あるいは当然か……まあ、いい。

そこで昨年総合優勝し今回も日本代表として参加していた私と、昨年格闘部門優勝者で他の国家代表選抜との特別マッチを組まれていた兄さんだが、二人して棄権した。

ん？　なぜ兄さんが特別マッチに参加したのか？

……そもそも兄さんはな、日本代表の座に興味を持っていなかったんだ。競技として戦い優劣を競う事ではなく、ひたすら真剣勝負での勝ち負けに拘り続けた兄さんは、モンド・グロッソや代表と言うものにさえ見向きしなかった。

では、何故第一回モンド・グロッソに参加したのか？

金だ。

兄さんはな、金が欲しいがためにモンド・グロッソに参加し、優勝したんだ。

軽蔑するか？ 兄さんを。

……そうか。お前も変わった奴だな。

実はな、兄さんは私たちの生活費を稼ぐためにモンド・グロッソへと向かったのだ。

その時兄さんは学校にも行かず、自らが唯一の男性操縦者であるというメリットを活かし、その情報や実験への参加で金を稼いでいた。あの莫迦に聞く限りだと、随分とあくどい稼ぎ方をしていたら

しいがな。その金で私たちの生活費をまかない、学費や必要費を払っていたのさ。

ほら、かつこいいだろ兄さんは？

……こほん、話を戻すぞ。

第二回モンド・グロッソでの棄権だったか。あれはな、お前も知っている通り、モンド・グロッソを観戦するためドイツに来ていた一夏が誘拐されたのさ、忌々しいことに、な。だから私たちは一夏を助けるためにモンド・グロッソを棄権した。

しかし、な。……兄さんは私よりも早く気づいたらしく、早々に一夏を救いに向かった。そこで兄さんは誘拐犯と戦い、左顔を斬られ、左目を失った。

私はショックだったよ。

兄さんは『柳生十兵衛みたいでかつこいいじゃないかい』となんでもない風に笑いながら言ってたが、兄さんに頼られていないと言う事も悲しかったし、それ以上に兄さんを助ける事が出来なかった自分が惨めで、悔しかった。

しかも、兄さんはこの怪我を理由に現役を引退し、その後ドイツへの借りを返すため私の分まで伴ってドイツ軍の教導に向かい、少しも遭う事が出来なくなつた。

あれほど自ら無力さに絶望した事はなかつた。正直、兄さんがいない間、一夏がいなければ心が潰えてしまいそうだった。……それからだ、本気で強くなろうと思つたのは。兄さんと並んで胸を張れる様に強くなろうとしたのは、家族を守るぐらいに強くなろうとしたのはな。……だがな、私の分までドイツへと向かつた兄さんに申し訳がなくてな、だからこそ私は兄さんのぶんまで一夏と共にいようとして、代表を引退したんだ。

……おかしいか？ 家族のために今まで積み上げてきたものを台無しにするのは。

ふふ、言うじやないか餓鬼。

私自身、後悔はしていないし、未練もなかつた。今でもあれでよかったと思つている。あの時の選択は間違つていなかったとな。それに、一線を退いて見えるものもあつた。

だからIS学園で教師と成り、家に帰れば一夏と過ごす、そんな生活に満足していた。ただな、兄さんがいないのが淋しかったよ。

……まあ、それも兄さんがドイツでの教導が終えて、IS学園で働く事になるまでだな。あの人が教師になるなんて、想像もしていなかったよ。

あとはお前の知る通りさ。兄さんはIS学園で私と働き、そして……。

……まあ、いいだろ。この話はここで終わるとしよう。

また機会があれば、何か話してやるさ。

IS学園一学年担当学年主任

織斑千冬（後書き）

始まってしまった連続投稿。

果たしてクリスマスが終わるまでに完結するのか。六にもわかりません。

IS学園一年二組担任 山田真耶（前書き）

メリーメリークリスマス！

IS学園一年二組担任 山田真耶

私が始めて万春さんと会ったのは、万春さんがIS学園に赴任してきた時でした。

いえ、以前から万春さんは知っていましたよ。ほら、万春さんは千冬先輩と合わせなくても有名人じゃないですか。だからよくテレビにも出ていましたし、モンド・グロツソでの試合や他の公式戦でも姿を見ていましたので、どういう外見なのかは把握していました。左目の傷跡も印象的でしたし、待機状態の『灰鶴』が剣つていうのも様になつてゐるなあつてずっと思っていましたよ。

けど、あの時職員室で万春さんとお会いして、びっくりしました。

代表候補生どまりだった私からすれば、万春さんは雲の上の人だったのでどうにも実際に会うまでその人がいると思っていなかったのかもしれない。い、いえ！『世界で唯一の男性IS操縦者』だった万春さんを疑っていたわけではありませんよ！

ただ、本当に万春さんがここにいるんだっていう実感がなかったんです。それにあの『織斑兄妹』が目の前にいると思うと、その、なんというかドキドキしちゃいまして……。

……先輩はIS学園の先輩でもあったので、大丈夫だったのです

けれど。そんな、ブリュンヒルデを蔑ろにしているわけではないです！

初めて会った万春さんの印象ですか？ …… 朗らかな人だなーと。

あの、貶めてなんてません！

テレビや試合場で見る万春さんは触れれば斬れてしまいそうな、刃の切っ先みたいな人だったんです。それに第一回モンド・グロツソでの万春さんの試合を見てみると、なんだか怖そうな人だなんて思いました。視線も鋭いですし、立ち振る舞いもです。だから決勝戦で先輩と万春さんが並んだとき、本当に二人とも似てるって思ったんですよ。見た目がとかじゃなくて、上手くは言えないんですけど、根本的に見えないところで繋がっていると言いますか。

だけど、職員室にいる万春さんは、その、とてもものんびりと言うか、マイペースな方でした。『ま、気楽に行きましょうや』ってお仕事って雰囲気に関係なく言っていましたねえ。

正直、あの時は万春さんじゃない人が来たんじゃないかって思ったんですけど、先輩と仲良く話しているあの人を見て、やっと目の前にいる男性と織斑万春さんが繋がったんです。

それから万春さんはIS学園で勤務しました。立場としては私の同輩に当たるんでしょうか。私、あのラストサムライと同じ立場にいるって思うと、すごくがちがちなったの覚えてますよ。……もちろん、私と万春さんの意味合いはすごい差がありますが。

教師としての万春さん、ですか？

そうですね。……何というか、いつもフラフラとしてました。いえ、そそそそんな、悪口なんかじゃないですってば！

教師としてやってきた万春さんでしたけど、あの人が担当しているのは実践訓練のみで、ほかの授業は担当してませんでした。……というよりも、出来ませんでした。

うつ、……実は万春さん高校に進学してなくて、しかも中学校も殆ど通っていないかった状態なので基礎学力の方が……。理由はそれとなく耳にしていますし、家族を養うためと言うことも聞いていましたけれど、でもやっぱり難しいんじゃないかと思いました。

いえ、だからと言って万春さんが教師として力不足だったわけではありません。寧ろ戦闘という場面に関しては、あれほど理に適った戦術理論を実践形式で見せながら教えられる方は万春さんを除いて他にいませんでした。

もともと万春さんは私なんかよりも遥かに長くISに関わった人です。それこそIS創成期からずっと活躍し続けてきた方ですから、経験という点で万春さんの話はとても貴重なものがありましたよ。

……本当ですよ？

それに、万春さんは気難しい生徒と上手く付き合える方だったので、そちらのほうではよく相談に乗ってあげていたそうです。よく万春さん『俺は無頼漢みたいなもんだしの』って言うてましたが、そういう点であの人を信頼する生徒も多かったです。非公式ですが、学園内でファンクラブがあったのも事実ですし。

何故知っているかって？ えっと、実は私もそこに参加していて、それで……。あの、これは先輩には内緒にしてください。約束ですよ？

……ただ、万春さんは自分の役割をこなすだけで、それ以上の事はしませんでした。

えっと、その。……万春さんは教師として非常に優秀だったんですが。……ええっと、真面目に働いてくれないというか、何と云うか、教師に向いていないといえますか。

いつも自分の担当はこなしていたんですが、それもたまに忘れてしまいますし、しかも授業しても『まじいまじい』と煙草吸ってましたし。サボる事も多くて、それどころか職員室にいることも稀で……。授業を担当する先輩の変わりに、よく万春さんを探しにきました。

だから、いつの間にか万春さんを探すのも私の仕事に入っていた

んです……うつ。

あ、でも、でも！ 万春さんよくそれで探しにいった私に色々ごちそうしてくれました。ご飯とか、ジュースとかコーヒーとか。それで『山田は楽しい奴だねえ』と言っていました。私としては可愛いとか、綺麗とか、その……。

ただただ大丈夫です、なんでもありません！

……万春さんがどんな授業をしていたかですか？

そういえば、あなたは万春さんの授業を受けてないんですね。

万春さんの授業は、その、なんというか、……すごかったです。

万春さんが担当する授業は希望者のみが行える実践戦闘演習だったのですが、あまりに過酷で人気そのものはありませんでした。私も一度参加させてもらったのですが、……ついていくのがやっとでした。いえ、そんな軍隊みたいな訓練をしたわけじゃないんです。生身での戦闘をはじめ、組み手、武装戦闘、そしてISでの断続的模擬戦闘を延々と続けていくんです。……シールドバリアー機能を切断して、ですけど。

『俺にやお前らに教えるもんなんざ、なーんもねえんだ。だから勝手にわかれ』と万春さんは言っていましたけど、万春さんは生徒に身体で覚えさせようとしていました。だからシールドバリアーを切ったIS訓練を行わせたり、ひたすら戦わせたりさせていました。そうですね、あれはISのために行う訓練と言っよりも、痛みを知るための訓練と言ったほうがいいでしょう。『痛くなかったら意味がねえ』……万春さんの言葉です。あの頃は千冬先輩の指導と合わせて、鬼の織斑兄弟なんて呼ばれていましたしね。

そんな授業をしているのですから、生徒さんには傷が絶えませんでした。皆さん女の子ですから傷跡なんてあつてはならない事なんですけど、生傷はまだ良い方でした。中にはIS同士の衝突で骨折をした生徒もいますし、万春さんとの組み手で泣き出す生徒さえいました。正直、怪我人の総数はひどいものでした。

ええ、本当にすごかったです。先ほども言いましたが、そんな事ばかりいつもするから、万春さんの授業に人気そのものはありませんでした。ですけど、万春さんの授業を選択して耐え抜いた生徒さんの殆どはクラス代表になりましたね。そして卒業後には国家代表へ選ばれた生徒もいます。

はい、凰さんや織斑くんがそうですね。お二人は万春さんの授業を選択して、見事に二年次ではクラス代表戦で優勝準優勝、そして卒業して遂には国家代表になったんです。凄いですよねーお二人とも。

そんな訳で危険な授業ではありましたが、成果が認められていたため万春さんの授業は行われていたのです。

……選択した生徒さんの殆どが万春さんが面倒を見た子ばかりでしたので、彼女達の熱の入りようは凄まじいものがありましたね。他の先生では難しかった生徒さんが、万春さんの授業を受けてからまるで戦闘集団のような感じになっていましたよ。

IS学園が幾ら兵器を教える学校とは言え、元々は普通の家庭で育った女の子も多かったはずなんですけれど、プロフェッショナルって言えばいいんでしょうか？ 兎に角、学生という感じじゃなかったです。何人かの生徒は彼女達に怖がってさえいました。傷だらけの女の子達が集団でいるんですから。

あ、そういえば万春さん、剣術部の顧問でもありましたね。今は違う職員が担当していますけれど、発足後は部を立ち上げた万春さんが担当していました。

やっていた事は万春さんがやっていた授業の延長みたいなものだったんですけれど、その……えぐかったです。

授業のほうはまだ授業としての形式があつて、しかも先輩の監視もありましたから大丈夫だったんですけど、剣術部のほうはそれもあまりなくて、万春さんが思うようにやってたんです。

気分で変える時もあったらしいんですけど、一対多での模擬戦や、無手対武装、超遠距離対近距離みたいな事を私が知る限りではやっていました。他にもどうやらとんでもない事をやっていたらしいん

ですけど、それを生徒さんに聞くと「地獄って普通にあるんですね」と笑いながら言っていましたね。……一体どんな事させていたんでしょうか、万春さん？

……本当に厳しかったですよ。私も今までのままじゃダメだと思っ
て、一度やらせてもらったんですけど、……うう、今でもトラウ
マですよ。『はは、山田一回死んだの』って顔に当たる寸前で振り
ぬかれた剣は。

ただ、殆ど辞める生徒はいなかったと聞きます。辞めるにしても
已む無い事情によるもので、皆必死になって訓練していましたよ。

ふふ、不思議そうな顔をしていますね。

私も最初は不思議だったんですよ。どうしてこんなに辛いのに万
春さんについていくのかって。

でも、彼女達を見てたらなんとなくわかった事があります。

万春さんはそんな気もなかったんでしょうけど、彼女達にとって
万春さんの傍はひとつの居場所だったのです。訓練とかは確かに辛
くて厳しいものだったんですけど、皆表情が輝いてました。

彼女達の大半はIS学園で成績も悪く、それに素行も良くない子
達ばかりでした。悪い子じゃなかったんですけど、なんというか、

個性が強い子ばかりで。それでクラスでも孤立してたり、やる気をなくして授業にさえ出る事を止めた生徒さえいたんです。IS学園は厳しい学校ですから成績次第では退学ということさえありますから、残念ながら彼女達の退学は時間の問題とさえ思われていました。だけど、彼女達は万春さんと出会ってから大きく変わっていきましたね。

何せラストサムライが教えるのです。世界中でもこんな事滅多にありませんよ？ 万春さんの手解きを受けられて、辛い分だけ腕を上げる事が出来るのですから、強くなっていく実感が持てたのでしよう。

それに万春さんの人柄もあつたんでしょうね。あの人は厳しいのに、本当に辛くてどうしようもない人がいると放って置けない人ですから。あは、『そんな柄じゃねえさね』ってもしかしたら言うかもしれませんね、万春さんなら……。

え？ 良い表情をしてた？

えーっと、ありがとうございます？

まあ、そんな訳で万春さんと波長の合った一部の生徒さんには極端に好かれていましたね。

その中には織斑くんや凰さんもいましたよ。

今では万春さん、千冬先輩、そして織斑くんを合わせて？織斑三兄妹？とIS業界では呼ばれるようになりましたけど、万春さんからはかなり厳しくされてましたね。授業や部活以外ではそうでもなかったんですけど、こと戦闘においては他の生徒と同じように扱われてました。……皆それが嬉しかったようです。万春さんは臍盾をしないんだって。

まあ、織斑くんが第二の男性適合者であるとわかってから『さすが俺の弟だわの』って言うてましたから、弟さんが可愛くてしかたなかったんでしょう。

……だから万春さんの弟子を名乗っていたラウラさんが転入した時は万春さんの教え子さんたち、荒れに荒れてましたねえ。

あは、はは……あまり思い出たくはないんですけど、聞きたいですか？

……生徒さんからの要望ですから、仕方ありませんね。
はあ。

詳しくはその場に居合わせたわけではないので私も知らないんですけど、その時使用していた剣道場がめちゃくちゃになって、怪我

人まで出たらしいですよ。それでもラウラさんに食って掛かるんですからね、すごいですね。

なんか生徒さん皆怒っていたようで、しかも万春さんも『やるならとことんやっちまいな』とか言って止めようとしなかったのので、余計に収拾がつかなくなったそうです。結局先輩が止めきて事なきを得たそうなんですけれど、……ラウラさん、先輩にも斬りかかったそうですよ。『師匠の栄光を汚した』と言ってたと報告もあります。

……もしこの話を詳しく聞きたければ、ラウラさんに聞いたほうがいいですよ。やっぱり、私の口から言ってもどこかおかしくなっちゃいますからね。

あ、そろそろの授業の準備をしなくちゃいけませんね。

ふふ、次に万春さんが帰ってきたとき、私がしっかりしている姿を見せてびっくりさせようと思ってるんです！

それじゃ、行きますね？

……最後に、私が万春さんを好きだったかですか？

そうですね。

それは、秘密です。

大人の女性は簡単に秘密を話さないものだって万春さんが言っていましたね！

オルコット家当主 セシリア・オルコット

決して。決して油断してたわけではありませんのよ。あの時私は万全の準備をして、自らの全てをぶつける覚悟を携えて万春先生の姿を捉えていましたわ。

万春先生のIS『灰鶴』は第二世代である『打鉄』をあの天災篠ノ之束が手を加え、そして独自に進化したものであり、全身装甲型の稀有なISでした。私も代表候補生として祖国で幾度も彼の姿を拝見していましたわ。

特にモンド・グロッソでのブリュンヒルデとラストサムライの試合は何度となく繰り返し見ていました。剣のみでもって斬り合う織斑兄妹、そして片方は碌にISの機能を使用しない男性操縦者。だから灰鶴の姿は知っていましたけれど、目の前で見たのはあれが初めてです。

ええ、そうですね。実際に見て最初は驚きましたわ。

全身装甲でありながら現ISで最小、そして最軽量であるあのISに。

訂正しておきますが、そのようなISが開発されようとした傾向は過去にもありましたわ。ですが、あまりに脆く全力稼動を行えば

忽ち自壊してしまうISなど使用できるはずもなく、その計画すら凍結されてしまいました。しかし、ただ唯一『灰鶴』だけは別ですわ。

肩部バインダーを失い、ISの特徴である腕部脚部の装甲は既存ISと比べあまりに小さく、万春さんの身体にフィットした装甲が特徴のIS。それでいてISがISとして機能できる最低限のシールドバリアーで起動し、生体機能補助も停止させて、あまつさえ地上に降り立っているのですから。

だからこそ、欧州で『灰鶴』は『フラジール』の名で知られていました。一回でも被弾してしまえば全てのエネルギーが失われてしまうのです。……正気の沙汰ではありませんわ。

しかし、あの時私は舐められている、と思いましたわ。『真剣で挑んでこい』と万春先生は仰っていましたが、幾らモンド・グロツソで優勝したとは言え、こんな男にイギリス代表は負けたのかと、憤りさえ感じてしまいました。

……後で思えば、なんて軽薄な事だと後悔しました。ですが、その時はそうやってラストサムライを侮っていたのです。

うふふ、おかしいでしょう。あの織斑万春を目の前にして私は未だあの時ラストサムライを見くびっていたのです。織斑万春もまた私が知る下賤な男の一人でしかないのだと、思い込んでいたのです。

チエルシー、お茶のおかわりを。

……美味しいですか。そう、よかった。それは先日、日本から取り寄せた煎茶ですの。紅茶は無論素晴らしいのですが、たまにはこういうのも悪くないかと思ひまして。それにあなたが来ると知れば、あの頃のことを思い懐かしむのも良いものです。

……ええ、本当に懐かしい。

もうずっと昔の事のように思えますが、実のところそんなに時間は経っていないんですもの。なんだかおばあちゃんになったような気分ですわ。ふふ……。

それほど、日本にいた頃が濃いものだったのでしょね。

初めて日本に降り立った頃などなんて低劣な国なのかと思っておりましたけれど。……ええ、その時は本当にそう思っておりましたわ。根拠なんてないというのに。ですけど代表候補生であるエリートとしての誇りと、オルコット家への矜持があ那时的の全てでしたので、自然とそう考えていたのです。

今思えば、そうして誇る事でしか、自分を保てなかった

のかもしれませんが。

母や父を失って、我がオルコット家を狙う輩から我が家を守るために頑張って、努力して、それでどうにか二人が残っていたオルコット家を死守することは出来ました。けれど、余裕なんてものではありませんでしたわ。

……だって、そのような事をしても、もう誰も私を褒めてはくれないのですから。

私の周りにいたのは下賤な男共や、資産簞奪を目論む野蛮な者ばかりで、誰も私が頑張った事を誇りに思うような方は残っておりませんでした。本当にいてほしかった人はいなくなってしまいましたし。

だから、あなたがいてくれて本当によかった。ありがとう、チェルシー。

……ふふ、そう言ってくれると嬉しいですね。

そうですね、話を戻します。

例え余裕がなくても、せめて優雅にあらうとして私は胸を張り続

けていましたけれど、それが劇的に変わったのは私のIS適正がAだと判明した後です。

そうですね、純粹に嬉しかったですわ。これでオルコットを狙う者の鼻をあかせる。実力でオルコットを守れると、本気で信じておりました。だからこそ私は死に物狂いで訓練し、代表候補生の座を手に入れました。

そのような状態だったからこそ、私は自然と女尊男卑の潮流を受け入れれていたのかもしれませんが。

……いえ、これは言い訳ですね。

私が男性に抱いていた想いなど、ただの私怨でしかありませんでしたのに。まあ、それも一夏さんと戦った後になんだか莫迦らしくなっていましたけれど。

ああ、そういえば万春先生と戦うに至った経緯を未だ話していませんでしたわ。私とした事が、自分の話ばかりしてしまいましたわ。いけませんわね。

そもそも、あの時は授業の一環で万春先生のデモンストレーションを兼ねていましたの。

やはり万春先生ほどの有名人はブリュンヒルデを除いていませんでしたから。それに、お二方がモンド・グロツソで見せた決勝戦での立ち振る舞いを忘れられない方々も生徒の中にはいましたので、IS学園に入学できた一つの恩恵として万春先生の戦いを見ることが恒例になっていたそうですわ。その時も万春先生の相手は通例どおり織斑先生か、もしくは山田先生を予定していたのです。

ですが、万春先生と戦うのは私になりました。……ええそうですわ、立候補したのです。

お二方には随分と渋い顔をされましたが、それでも譲るつもりはありませんでしたわ。

だって折角ラストサムライと戦える機会があるというのに、それを手に入れないなどあつてはなりません。そうでしょう？

織斑先生には『代表候補生程度が何を抜かす』と脅されましたけれど、結局『たまにはそういうのも良か良か』と万春先生が仰つて下さったので、あの一時が許されたのです。一夏さんも戦いたかつたらしいですけど、『練習相手じゃ意味ねえんだ』とお止めになつたらしいですわ。

だと言うのに、私は万春先生を見くびっていたのですから、お話にもなりませんわ。所詮は過ぎた伝説だと、心のどこかで

思い込んでいたのかもしれませんが。

万春先生、普段は『腹が減った腹が減った』といつもお腹を空かせて、織斑先生のお弁当を楽しそうに『んまい、んまい』と言ったり、やる気のない姿ばかり見せていましたし、スーツもだらしく着て、それで煙草をいつも啜っていたのですから。そんな姿を見ていたら、その人が強いだなんて思うこともありせんわ。

……まあ、それも私が未熟だった。それだけの事だったのです。

試合が始まった直後私は『ブルー・ティアーズ』を飛ばし、包囲網を作り上げました。その時地上で佇んでいる万春先生は結局包囲網が展開し終えるまで動きさえいたしませんでしたわ。

そう、あれは私に主導権を握らせるのではなく、あくまで万春先生がやらせてあげた形に見えましたけれど、実のところあのお方はあれがひとつのスタイルでしたの。何故なら万春先生に射撃はあまり関係なかったのですから。もしかしたら、障害にさえなっていなかったのかもしれませんが。

……私は自分の力に自信を持っていました。未だブルー・ティアーズの運用に不安はありましたがそれでも遠距離からの銃撃を行えば問題はないだろうと。先日一夏さんの決闘を経た私にはどうやってこの距離を保ち、一方的に勝利を収めるかばかり考えておりました。

私はハイパーセンサーを使用して状況を確認しました。気候、機体状況、相手の武装、佇まい、こちらの武装数。

……いけると、思いました。

でも予想を超えていましたわ。

最初は何が起こったかわかりませんでしたの。死角をつく形で強襲したブルー・ティアーズ二機のレーザーが切り裂かれたのです。

レーザー兵器は実弾よりも早い銃撃を可能としております。収束した光速の弾丸と言えはわかりますよね？ その威力、その熱量、その速度は段違いですわ。それが撃たれた瞬間に散ってしまったのです。

そして再びそのような事が起こり、私はようやく理解したのですわ。

事はシンプルでしたわ。万春先生は自らに向かって撃たれたレーザーの狙撃を近接ブレード『絶景』で切り裂いただけですの。

ただその速度があまりに速過ぎて、私には万春先生が切り終えた後の姿しか見えなかったのです。ただ、ハイパーセンサーを用いてどうにか確認することができましたの。

……ふふ、そうですね。とても理不尽ですね。

しかも『絶景』は一夏さんが持つ白式の『零落白夜』のような能力の産物ではありませんわ。『灰鶴』ワンオフ・アビリティの単一仕様能力には純粋な攻撃力さえもっておりません。

万春さんはただ圧倒的速度で『絶景』を振り抜き、ブルー・ティアーズのレーザーを切り伏せてみせたのです。

ありえませんか？　けれど、そんな理不尽が私の目の前に事実として現れたのです。

確かに万春先生が優勝したモンド・グロツソでは銃器の使用はありませんでしたわ。でも、それは万春先生が格闘部門に参加したからです。近接戦闘という限定されたルールでの戦いだからこそ、万春先生は勝つ事が出来たのだと、私は思い違いをしていました。

だって、私は見落としていたんですもの。

万春さんが公式戦で見せた戦いというものを。あのお方は相手がどれだけ距離を取り、一方的な弾雨を浴びせても、ただ己の剣で全てを切り開いたのです。

しかも、私は未だブルー・ティアーズの単体操作しか行えない未熟者。歯が立たないのは当然の事。

……あの絶望感は途方もないものでしたわ。私が今まで培ったものが何一つとして通用しない、何をしても無駄と言うあの無力感を。

それでも私は諦めきれずに銃撃を放ち続けました。ブルー・ティアーズの包囲網と共に、完璧に近いタイミングでミサイルを放ちもしました。それを万春先生は切り裂き、見切り、僅かな身動きで避けていくのです。一度も空を飛ばず、地面に足をつけたまま。

だからでしょうね。もう何も出来なくなった私は、狙撃者としての冥利をボロボロにされて焦り、状況打破のためにインターセプトを握り締めて万春先生へと向かっていったのです。狙撃者が自ら近距離戦を挑んだのですよ？ 結果は見え見えでした。

気づけば、私は負けていましたわ。

ええ、近づいた瞬間に私は『絶景』で切り捨てられ、絶対防御を

発動させていましたの。

斬られた瞬間の事はよく覚えていません。それを認識する間すら与えられず、私のブルー・ティアーズは敗れたのです。

……あの戦闘は未だ忘れられません。あれから私は何度となく戦い、あるいは死闘へと巻き込まれましたが、あそこまで手筈も封じられ、一矢報いる事無く敗北したあの時を。まるで、魔法にかけられたようでしたわ。

実は二ヶ月前、私は第一回モンド・グロツソで万春先生に敗れた当時のイギリス代表と話す機会がありました。

彼女は万春先生との戦いを『蟻地獄か、攻城戦のようだった』と仰っていましたわ。後で確認してみると、確かにその通りでした。彼女もまた万春先生に一撃も与えられず、またその『灰鶴』に触れる事すら許されず撃墜されたのです。

だからこそ第二回モンド・グロツソで国家代表選抜との特別試合を万春先生が棄権したと知り、涙を流すほど怒り狂ったと聞いています。彼女は万春先生と戦うため、国家代表の座であり続けたというのに、その相手が自ら棄権し、どこかに消え去ってしまったのですから。

彼女がどのような気持ちを抱いたかまでは察する事ができませんわ。屈辱、怒り、諦観。そして安堵。様々なものが溢れて止まらなかったと言っていますが、……事はそんなに単純なものではなかったのかもしれませんが。

当時、世界唯一の男性IS操縦者であつたあのお方は人々の瞳に己の勇ましき姿を焼き付けていきました。ただ強い。己の剣士としての技量と、その矜持のみで戦い続け、優勝を果たしたあのお方を忘れる事など出来ませんわ。『俺にや剣しか取り得がねえし』と言っていました。が説明など不要なぐらいに強くあり続け、そしてそんな万春先生に人々は引き込まれていったのです。彼女もまた、あの人に心奪われた一人です。

あの、ファントム・タスク亡国機業のエージェントと、同じように。

私、ですか？

……うふふ、私はそうではありませんわ。

確かに万春先生を教師として仰ぎ、慕ってはありましたけれどもの心までは奪われませんでしたの。

だって、その時はすでに私の心は一夏さんに奪われていたのですから。

……でも、もしかしたら順番が逆で、私が一夏さんよりも先に万春先生と戦っていればわからなかったかもしれないわ。それほどまでに万春先生は魅力的な男性でしたから。

大丈夫です。あなたが心配するようなことはありませんわ。

はあ。全く一夏さんや織斑先生といい、皆さんブラコンなんですから。

……もうあれから四年以上経ちますのね。

私はあの敗北が忘れられないからこそ今も代表候補生の座に甘んじております。

すでに一夏さんや鈴さんには先んじられましたが、国家代表の座を諦めたわけではありませんのよ。

私もすぐにあの場所に追いついて見せましょう。織斑先生や、万春先生の薫陶を受けた身として恥じないように。

オルコットの名と、そして私自身の誇りにかけて。

オルコット家当主 セシリア・オルコット（後書き）

今更ながらに予約投稿の便利さを思い知るなあ。

中国代表 鳳鈴音（前書き）

メリクリ！

中国代表 鳳鈴音

まあ、色んな人からあの人の話を聞いてきたんでしょうけど、私から言わせて貰えば万春さんは泣き虫よ。それもしょっちゅう泣いてたわね。

……いやいや、怒らせるつもりなんてないわよ。ただ私が思っていることを言っただけで。

それに、あんたは万春さんが泣いてるとこなんて見たことないでしょ。そりゃそうよ、だってあの人あんた達の前では強がってばかりいたんだから。

え、なんでかって？

そりゃあんた達が万春さんの家族で、兄妹だからよ。しかも万春さん兄妹で一番上の兄貴だから、弱いところなんて見せなくなかったんじゃない？ 立場にしても、大黒柱って感じだったし。本当のところはどうだかなんて、わからないけどね。

にしても、あんたよくそんな事聞くためにわざわざここ（中国）まで来たわね。電話でもすむ話じゃない。……はあ、なんだかその自由さが羨ましいわ。国家代表になってから色々と面倒なものが増えたから、本当にそう思うわよ。

ま、そんな事私には関係ないけどね。私は私で勝手にやらせてもらってるわ。

それで、なんで私が万春さんが泣き虫だっと思ってたのかって言えば、私があの人と始めて会ったとき、万春さん泣いてたのよ。

ああ、どうしてそんな事になったかまでは聞かないですよ。私もちゃんとは知らないんだから。

小学五年の時だったかしら。一夏と仲良くなってちょっと経った頃の事だと思うけれど、あいつん家に遊びに行ったのよ、私一人で。

そしたら一夏の奴がいなくて、しかも雨まで振り出すじゃない。通り雨ってやつだったんだけど、どうしようかと思ってたら鍵が開いてたのよ。その時私がこのままじゃ嫌だと思ったんだか知らないけれど、鍵が開いてるならって家に入っちゃったのよね。

……不法侵入って言わないでくれる？ 私だっっていけない事してるかもしれないってその時にはわかってたんだから。

そしたら家の中で万春さんが寝てたのよ。

その時は万春さんが有名人だって知らなかったわ。モンド・グロツソが終わった後の事だけど、万春さんの顔とか私興味なかったし。『世界唯一の男性IS操縦者』だとか、そういう人がいるってのは知ってたけど、所詮画面の向こうじゃない。遠い世界にいる人に熱中するほどISのファンでもなかったしね。まあ、弾みたいのにめりこむ場合もあるけど。

……ああ、弾？ あんた知らないの、蘭の兄貴よ。

ふーん、あいつ教えてないんだ。……相変わらずね、あの二人も。

話戻すわよ。それで一夏にお兄さんやお姉さんがいるって話はきいてたから、この人がその万春さんだって気づいたの。万春さん帰国したばかりで、妙に疲れてたらしくてね、私が入ってきても全然起きないのよ。ありえないでしょ。『立てばもののふ、座れば剣士、歩く姿は武士の華』なんて海外では呼ばれてたあの人がよ。いっくら寝起きを襲っても返り討ちにした万春さんがよ。モンド・グロツソでよっぽど疲れてたんでしょね。……まあ、その時にはそんな事も知らなかったんだけど。

そしたら何か気になってね、万春さんの事が。じっと座って見たのよ。ああ、別にその時にかっこいいとか思ってたわ。もちろんあの人はかっこいいけれど、でも小学五年生にそんな感性求めないでよ。ほら、子供ながらの直感って言えばいいのかしら。なんだかこの人は違うぞ、ってね思ったんでしょね。

でね、しばらくしたらさ、あの人が泣き出したのよ。

寝ながらね、涙流したのよ。

そうね、何だかショックだったわ。

私あの頃、男の人が泣いてる姿をよく見てたわ。ISが登場して、男の人の立場がどんどん悪くなってるって、それでね。だから言っちゃえば男の人の涙なんて見慣れてたような気がするわ。

……でも、あれは別だったわ。何が何だかわからないけれど、ただその人が悲しい事でもあって泣いてるんじゃないかって思って、もしかしたら悪い夢でも見てるんじゃないのかなってね。でも寝てるからどうしようもないし、それにはじめて会った知らない人だから起こすなんて出来ないわ。

それで私ね、気づけば万春さんが泣き止むまですつと涙をふいてた。

正直止める事は無理だし、それでも何かしたかったからかな。

それが万春さんとの出会いよ。

それから一夏が帰ってくるまで、一緒にいたんだけど、万春さん自分が泣いてた事に気づいてね。それでそれを知った私に驚いてたのよ。『まさか、誰かに見られるなんてなあ』なんて言いながらさ。

たぶんそれで箍が外れたんでしょうね。万春さん私の前だと泣けるようになったらしいわ。……おかしいでしょ、十歳年下の女の子の前でしか泣けない男なんて。

だから、あの人は泣き虫なの。もうそれで私の中ではそういうイメージで固定しちゃってるわ。変えようもない。

嫌じゃなかったのか、って？

さあ、どうとも言えないわね。面倒だっと思ってもらいたし、男が泣くなんてかつこ悪いって思っていたかもしれないわ。でもさ、それで私、一回だけ千冬さんに頭下げられた事があるのよ。『すまない。私だけでは駄目なんだ。私だけでは兄さんを助けられない』って真剣な顔で言われてさ。……そんな事で頼られるなんて始めてだったから、嫌だなんて言えないじゃない。

それに私は私で悪い気はしてなかったのよ。今だってあの人に比べればずっと子供だけど、それでも自分が誰かの役に立って、しか

も必要とされてるってわかったからさ。それをうんと考えて噛み砕いて、理解して、その役目を受け入れたってわけよ。

だから、あの人の泣き顔はわたしだけのものよ。

……ずるい、ですって？ 残念ね、これはあんただってラウラにだって千冬さんにもそう、誰にも譲るつもりはないわ。万春さんの涙や弱い所、全部わたしのものなの。もうこれは決まった事よ、仕方ない事なんだから。

ああ、ごめんごめん。にやけるのは止めるわよ。

でも、そうね。 あれが私の初恋よ。

そして、まだそれは続いている。

これから先、違う人を好きになるなんて考えられないくらい、私は万春さんが好き。

何よ、その顔。そりゃ本人が目の前にいないから、これぐらいは言えるわよ。……まだ直接こんな事言える自信ないけれど。

だからさ、両親が離婚して中国に帰らなくちゃならなかった時、どうしても中国に行きたくなくて家出までしたわ。

ずっと会えなくなるなんて、その時の私には想像できなかったけれど、でも折角出来た友達や万春さんの傍にいられなくなつて、もしかしたら二度と一緒にいる事が出来なくなるんじゃないかってわかつちやつたからさ。

……それで、家出。いやあ、私も若かつたわね！。

走るだけ走つて、それで嫌なことから逃げるだけ逃げて。

私気づいたら知らないところにいてさ。見たことない景色に、見覚えのない地形。それに周りには知らない人ばかり。ほんと、どうしようかと思つたわよ。最悪、このまま死んじゃうんじゃないかって本気で怖くなつて、その内不安で涙が出てきちゃった。

そしたら万春さんが私を見つけてくれたのよ。『おお、なにしてんだ鈴音』って言いながらさ。うちの親が連絡とつたらしいんだけど、それで万春さんが探しに来てくれたってわけ。

ありえない話でしょ。あの人良い意味でも悪い意味でも身内にしか興味ないし、それも剣とどっちか大事かつてなつたら両方取るぐらいに大事にしてるからさ、その時なんて一夏や千冬さん以外に関

心持ってる人なんていなかったんじゃないかしら。私だって一夏の友達で自分が楽になるために利用してるって考えてたと思うわよ。

でも、実際に万春さんが私を探してくれたのよ。『帰る場所があるなら帰ったほうがええ。それでも帰りたくないなら俺んとこに来い』って泣いてる私を慰めてくれてね、そのまま背中におんぶしてもらって一緒に帰ったわ。

それがたぶん切っ掛けなんだろうけど、好きになっちゃったのよねえ。ううん、好きだったんだけど自覚がなかったのよ。ただ、それに気づいただけ。

……おかしな事じゃないでしょう。女の子って大人っぽい男に憧れるもんなのよ、少なくとも私はそうだったわ。万春さんがラストサムライってわかってからそれも凄かったわよ。なんかもう、近所に住んでる友達のお兄さんから一気にランクが上がって憧れの人って感じで、ずっとついて回ってたような気がする。たぶん一夏と同じぐらい一緒にいたわね、あれは。

だけどね、向こうからすれば十歳年下のがきんちよだったから、全然まともに相手してくれなくてさ。『鈴音は愛い愛い』ってさ。それが無性に腹立ったのよ。いくら一夏の友達だからって、それ以上として見てくれないのはどういう事だこんにやるー！　って。

それでまあ、結局中国に帰ってからISに乗って、いつの間にか

代表候補生になってたわけ。理由は才能があつたからつてのもあるけど、万春さんに認められるにはISしかないんじゃないかって、本気で思ったからよ。……一夏もきつと同じ気持ちだった。あいつのほうが根は深いかもしれないけどね。

でも、日本に戻って折角それを見せようとして、自分がどれだけ間違つてるかと思ひ知つた事があるわ。

一年の時か、クラス対抗戦の時に一夏と戦つてたら無人機ISに襲われてね。そう、無人機。まだ実用段階でさえないものが実際に私たちを襲つてきてんだから、たまつたもんじゃなかったわよ。

それで、私は一夏と協力してどうにかそいつを倒したんだけど、そしたら壊したはずのそいつがまだ動けてて私たちにレーザー売ってきたのよ。私その時には完全に気が抜けちゃってさ、避けられるはずもなかった。そのレーザー、アリーナの防御壁ぐらいなら簡単に壊せるものだったら、『あ、死んだ』って思つたわ。一夏がカバ―に来てくれてたけど、それも間にあう感じじゃない。これで死ぬんだ、もう万春さんに会うことも出来ないんだって、何かその時々々と考えたわ。

……だけど、それを万春さんは切り裂いてくれた。直撃すればISぐらい完全破壊できるビームを。しかも万春さんの『灰鶴』は一発でもダメージが入れば終わる代物なのよ。

どうなのかしらね。自分から死にいく人の気持ちなんてわからないし、そんな危ない場所に自分から飛び込んでいくような真似、中々出来ないわよ。

私？ 私は……って、あんた。

……そんなわかりきってる事を私に言わせるつもり？

まあ、いいわ。だからそれで私はますます万春さんが好きになっただけ、でも悔しくてさ。結局自分は何も変わらない、ただの子供のままなんだな、てさ。全然万春さんに追いついてない。それどころか、目の前で見せられて初めて万春さんの核違いな強さを理解しちゃったから。それで落ち込みもしたし、泣きそうになったりもしたわ。それまで持ってた意地とか全部忘れてね。

でも、あの人卑怯なのよ。そういうときに限って、私を探してくれる。

だけど、私つては落ち込んでて卑屈になっててね、素直に万春さんの事見れなかったの。

そしたら、あの人なんて言ったと思う？

『何も言う事なんてないけど、お前が無事でよかったさ』って笑いながら言ってくれたのよ。

……ええ、堕ちましたよ。墜落必至だったわよ！

それで、万春さんの言葉でわかったものもあるの。今はまだしゅうがない。でもこの人に笑って欲しいから、今度は私がこの人を守れるくらいに強くなってやろうってね。

笑いたければ笑えばいいわ。あの織斑万春を守るって言うてるんだからね。私も頭おかしいんじゃないかって偶に思うわ。でもそれを私は正しいと信じてるし、これは私の道だからね。……間違ってたって後悔なんてないわ。

だから、万春さんの授業も剣術部も耐えてきた。まあ、生身でISと戦えとか言われたときはこの人、人間じゃないわって怖くなっただけ。

だけどね、全部を凌いで飲み込んでいったら実際に強くなっていたし、万春さんと過ごす時間も多くなったから良かったわよ。それに、たまに万春さん私の頼みも聞いてくれるから、昔みたいにおんぶしてくれたいね。

……ラウラがだっこされるのは、なんか気に入らなかったけど。

万春さんはまだ私を認めてくれない。少なくとも、こんなぐらいじゃまだまだだってあの人に言われなくなつてわかるわよ。

だから今度のモンド・グロツソ。私は絶対に負けるわけにはいかないの。一夏なんかで躓いてられないわ。私は全部を追い抜いて、万春さんの隣に立つ。そのためなら千冬さんにだって負けない。……うう、ちよつと怖いけど。

にしても万春さんの隣にいる千冬さんとかすごいお似合いなのよね。というかやっぱり乳？ 乳なのかしら！？ 千冬さんといい、山田先生といい、やっぱり大人の魅力は乳で決まるってーの！？

ちよつとあんた。あんたまで胸でつかくなりやがったら、それをもいで私の糧にしてやるからね！

中国代表 鳳鈴音（後書き）

十歳年下に泣きつく男。
なんかすごいな。

年を経てもちつぱい鈴。これでいい、六もそれがいいと思う。

デュノア社社長 シャルロット・デュノア

遠いところからわざわざありがとう。久しぶりだね、皆は元気にしてた？

そつかあ、皆相変わらずなんだね。ふふ、なんだか嬉しいなあ。自分だけ変わらないでいたら、それはそれで置いてけぼりされちゃったみたいなものだしね。

それで、何を聞きたいのかな？ 応えられるものなら答えるけれど。

……なるほどね、万春先生の事か。

うーん、そうだなあ。ちょっと難しいかなあ。……ああ、ごめんね。折角来てもらってあれんだけど僕にあんまり喋られる事なんてないと思うよ。君が聞きたいようなものがないかもしれないし。それでも良いの？

うん、じゃあわかった。僕が知ってる万春さんの事だけでも良いなら話すよ。

でもさ、君も知ってる思うけれど。……僕、万春さんの事苦手だ

ったんだよね。だからあんまり仲が良かったわけでもないし、一緒にいた事も少なかったんだ。

ああ、嫌いだったわけでもないし、直接何かされた事だつてなかった。それに先生としては尊敬もしてたから安心して。だけど、ちよつと先生らしくない人だったかな。いつもだるそうに煙草吸ってたし、『今日は何食ったっけか？』ってお腹空かせてたしね。懐かしいなあ。

ただ単に僕が勝手にあの人に苦手意識持ってただけの話だよ。

……なんでかって？ あはは、いきなり踏み込んでくるね。

そうだね、なんでだろう。ずっとそれがどうしてなのか僕にもわからなかったんだ。でもIS学園で万春先生と会ってからしばらく経って、それで卒業してから会社を乗っ取って、ようやくわかった気がしたんだ。

僕はね、あの人が苦手なんじゃない。あの人が怖かったんだ。

僕も皆と同じように、万春さんの事は知ってたよ。ISに関わる前からね。『世界唯一の男性IS操縦者』で、第一回モンド・グロツソ格闘部門の初代優勝者。近接ブレード『絶景』のみで戦い、全てを切り裂いた飛ばない戦士ラストサムライ。すごいよね。

……とても僕にはそんな真似できないよ。

でも、モンド・グロツソや引退前の公式戦を見て、ちょっと違和感
て言うのかな、引つ掛かりみたいなのを感じてたんだ。それが何
なのかまではわからなかったけれど、見れば見るほど『フラジール』
を操るラストサムライの姿が目には焼きついて、それが嫌だった。

理由もわからずにね。

君も知ってるよね、万春さんの強さ。世界でたった一人しかいな
いISを使える男の人だけど、戦ってるのは対戦相手だけじゃなく
て世界だった。

女の人しか使えないISを男の人が操縦できるんだから、きっと
女の人からも男の人からも厳しい目で見られてたと思うよ。……そ
れに、ISっていう兵器に乗って戦うんだから、どんなに怖いんだ
ろう。誰かが助けてくれるかも怪しい世界で、あの人はたった一人
ぼっちだったんだ。

そうだね、僕はそうやって万春先生に自分の気持ちを押し
付けて、自己投影してた。

特にお母さんが亡くなって、父に引き取られてからそれが強くな
っていったよ。当時のデュノア社で僕はたった一人で、誰も助けて

くれない。父は僕を政治の道具にしか見ていなかったし、相手の母は僕を目の敵にした。仕方ないかもしれないよね。自分の好きな人を取られていた形で、しかもそれに全く気づかなかったんだから。

……それから僕はずっとあの人を追いかけてた。表には出られなかったけど、公式戦の記録データを貰って見続けてた。この人は僕と同じように独りぼっちなんだって思いながら。

でもね、あの人は全然そんなの関係なかった。

世界とか、兵器とか女尊男卑とか関係なくて、目の前にあるものはなんだろうが切り捨てていった。それがどれだけ凄い事かすらどうでもいいようにね、障害や壁を切り開いていったんだ。

……僕はね、嫌な奴なんだ。そんな万春先生を見て、嫉妬さえしてたんだから。なんでこの人は僕と同じように一人ぼっちなのに、こんなに強いんだらうって。何も出来ずに流されるしかない僕には眩しくて、……苦手になった。

だからさ、一夏が現われてIS学園に男として転入するってわかってから、チャンスだって思ったよ。直接この目で確かめてやるってさ。父の言い分に従うしかなかった僕だけど、それだけは譲れなかった。そもそも一夏のデータを盗む呈で行く事になってたけど、優先事項は違った。僕にとって一夏よりもラストサムライのほうが重要だったんだ。

でも、直接万春先生を見てから、そんな気持ちもなくなつたよ。

あの人さ、初めて会ったときに僕を見てたんだ。ラウラに抱きつかれてぶらさげながらもさ、『余計な事すれば首もつてくぞ』って言うてるのが目を見てわかった。なかなかないんじゃないかな。初めて会った人に殺気をぶつけられるなんて。

その証拠に待機状態で刀の形状をしていた『灰鶴』をいつでも抜けるようにしていたからね。見せ付けるみたいに。

……万春先生は全部わかってたんだ。僕が女で、一夏のデータを盗もうとしているってさ。まあ当然かもしれないよね。IS学園がそんな簡単に行くはずもない。しかも相手は織斑兄妹。ブリュンヒルデとラストサムライ。特に『世界唯一の男性IS操縦者』だった万春先生は情報スパイの相手なんて飽きるほどやってたみたい。僕みたいな小娘がどうにかできるものでもなかった。

あの人は僕が思ってたような人と全然違ってた。僕は勝手な思い込みであの人を自分と同じ一人ぼっちな人と見当つけて、それに縋ってたけど、でもそんな事はなかった。万春先生には織斑先生がいて一夏がいて、それにラウラや鈴やもつとたくさんの人がいた。一人ぼっちでもなんでもないよ。……それですごく怖くなったんだ。結局僕は一人ぼっちで力を持たない奴でしかないんだってね。

それから僕は一夏にばれたんだよ、女だって。

……まあね、気が抜けてたというか、一夏を舐めてた結果だね。

それにね、その時には僕はもうなんだか全部がどうでも良いやって思ってたんだ。変な話じゃないでしょ。望みは違った。僕の勘違いで。それだけで僕はもう駄目になっちゃったんだよ。だから一夏が誰かに話しても抵抗するつもりもなかったし、フランスに戻されても逮捕されても仕方がないなって思ってた。

でも、一夏は言ってくれたんだ。『俺が助ける』ってね。

嬉しかったな。始めてだったんだよ、そんな事言われるの。

あ、一夏の話になってたね。ごめんごめん、話戻すよ。

でも、一夏だって関係してるんだよ、この話。

一夏はさ、ずっと家族の助けになりたいって思ってたんだ。ブリュンヒルデとラストサムライが兄妹ってすごいけど一夏は一夏で色々考えててさ、話は聞いてたんだけど万春先生の左目に走った傷跡

って誘拐された一夏を助けるためについたものなんだ。それを一夏
すごい気にしててね。それを理由に二人とも現役引退しちゃったか
ら、余計にそう思ってたんだと思うけど、『二人が弟として家族と
して、一人の男として誇れるようになりたいんだ』って言うてた。

……敵わないなあ、って思ったよ。一夏は僕と違って流されずに
強くなるうとしてた。万春先生や織斑先生と同じだね。皆自分のた
めに、誰かのために強くなってた。

だからさ、僕も頑張ろうって決めたんだ。今まで一度もそんな事
考えずに、流されていつか楽になれるってじつと耐えてきたけど、
……抵抗するだなんて想像もつかなかったけれど、それでも許され
るなら自分の未来は自分で切り開きたい。

その結果が今だよ。もうこの会社は僕のもの。

……ふふ、笑っちゃうでしょ。僕だってあの頃には夢にも思わな
かった。

我儘に生きて、自分の思う自分になるためには強くならなくちゃ
いけないんだ。勿論それは純粋な強さじゃないよ。誰にも負けない
意志と心の強さ。それを僕はIS学園で学んだ。それがなくちゃ、
僕はあのときつと潰れてただろうね。

まあ、これも万春先生の受け売りだけど。『単純な強さは純粹な強さほど輝かない』って。

でも、それを強く思ったのはツーマンセルトーナメントの時かな。

あの時僕は一夏と組んでラウラや箒と戦ってたんだ。でもね、ラウラは僕やパートナーだった箒にも興味なくて、一夏だけを狙いつけてた。

なんだろうね。因縁って言えばいいのかな。ラウラはずっと一夏や織斑先生を目の敵にしてたんだ。理由はラウラが万春先生の弟子で、ラウラは万春先生が引退する切っ掛けになった一夏や、それに妹である千冬さんを恨んでたからだよ。ううん、あれは憎んでたって言うてもいいよ。だってあの織斑先生に真っ向から反抗してたんだから。それぐらいすごかったんだ。しかも転入初日に一夏をビンタして床に叩き落したんだよ。

……信じられないでしょ。君が知ってるラウラから見れば、そんな事するはずがないよね。いつも鈴と一緒にラウラったら万春先生につかまっておんぶにだっこされてたんだから。あの二人可愛かったな。『あんた降りなさいよ！』『貴様が降りるがいい！』ってずっと引っ付きながら言い合ってたっけ。

だけど、それだけじゃなかったよ。僕はその時いなかったけれど、

ラウラ万春先生が顧問をしていた剣術部に乗り込んで、部員全員を滅多打ちにしたらしいんだ。

ラウラは軍人で、しかも万春先生の弟子だったからね。皆も善戦はしたらしいけれど負けちゃったんだ。んでね、それに一夏が怒ってね。組み手するはずだったんだけど、織斑先生に止められた。

『好きにやらせるのが良いんだぞ』って万春先生は言ってたけれどね、結局因縁はツーマンセルトーナメントに持ち越した。

正直ラウラの気持ちが変わらなくもなかったんだ。

あの子はね、あの時万春先生しかいなかったんだ。仲良くなつてから聞いたんだけど、ドイツ軍で駄目になっていた自分を救ってくれたのが万春先生だったんだって。誰から見放されて、誰も助けてくれない自分の前に現われて強くしてくれたのが万春先生だった一人だから、ラウラは万春先生以外いらなくて、万春先生たった一人を求めたんだ。

……まるで僕みたいでしょ？ 理由はどうであれ、僕たちは違う形で万春先生を求めてた。だからね、どうしても他人事のようには思えなかったんだ。この子も僕と同じような人だったんだってね。でも僕はその時頑張ろうって決めたからさ、ラウラにだって負けやしないって覚悟を決めたんだ。一夏だってそうだった。

……ここから先の話は守秘義務に引つ掛かると思っけど、大丈夫？

そっか。じゃあ、誰にも言わないって約束だからね。もし喋ったりしたら、怖いよ？

異変が起きたのは、箒を倒してラウラを倒しかけた時だった。ラウラの『シユバルツェア・レーゲン』がね、変化していたんだ。

そしたらさ、僕たちの前に黒い『灰鶴』が現われたんだよ。

そうだね。あれはVTシステムによるものだった。違法なはずだったんだけど、何故かそれがラウラの機体に組み込まれていたんだ。何故か、なんてわからない。ただ現実として僕たちの前に『灰鶴』が現われたんだよ。

『灰鶴』はね、当時のISで最も壊れやすいISとして知られていて『フラジール』って呼ばれていたんだけど、あの威圧感はそのものの感じさせなかったよ。『絶景』を腰に構えていつでも切りかかれる体勢のまま佇んでいる姿も、万春先生の姿そのままだった。でもあれは『灰鶴』じゃなかったのは一目瞭然だった。だって、『灰鶴』がPICで浮遊してたんだもの。

欧州で『灰鶴』が『フラジール』って呼ばれてるのはね、ISで
ありながらISではない戦法をやるから、その侮蔑が込められて
るんだ。空も飛ばないで、いつだって壊せるはずの機体だから『フ
ラジール』。

だからだろうね。一夏はものすごく怒った。そりゃそう
かもね。だって憧れだった自分のお兄さんの姿を真似られて、しか
もそれが偽者なんだから。あの時の一夏はすごかったよ。たぶんあ
れほど一夏が怒ったのは、あれぐらいじゃないかな。

それで一夏は『灰鶴』に挑んでいった。でも、やっぱり偽者だろ
うとも『灰鶴』は『灰鶴』だから、一夏は全然相手にならなかった。
速過ぎて斬られた後に斬られたってわかるしかないほど、圧倒的な
剣の冴えで『灰鶴』は一夏を切り捨てていった。

だけど、一夏は全然諦めなかった。敵うはずもない相手だってわ
かってたのに。

でもね、一夏さ『こんなもんで行く道引いてられっか！』て叫
びながら斬りかかっていったんだ。

かつこいいよね。あんな真っ直ぐな人、他にはいないよ。

……一夏にとって万春先生ってどういう人なんだろうね。今でも

わからないんだ。憎んでもないし、嫌いでもないし、それどころか好きだって言ってたしね。でも、追いついて乗り越えたい相手だったのかなあ。

ほら、男の子って絶対負けられない、負けたくない相手がいるんだ。それが一夏にとってはお兄さんの万春先生だったんだろうね。それがどういう気持ちからくるものかわからないけど、僕はそう思うよ。

結局その後、ラウラが負けて『灰鶴』の姿も消えた。一太刀だけ掠った零落白夜が『灰鶴』を消し飛ばしたんだね。『灰鶴』のそんなところまであればトレースしてた。

……実は僕さ、試合の後で万春先生の事見かけたんだ。結局後の試合が全部無くなっちゃったから、他の生徒とかの事で忙しかったはずなんだけど、織斑先生が気を失っていた一夏を看ている間、万春先生はずっと外にいたんだ。

それが気になって僕ずっと見てたんだけど、万春先生煙草吸いながら遠くを見てたよ。ずっと、ずっと遠い所、見えないところを見るように。なんだか話しかけちゃいけない雰囲気だったからそのまま一夏の所に向かったけど、あの時万春先生は何を考えてたんだろう。

僕が話せるのはこれくらいかな。ごめんね、あまり目新

しい話じゃなかったでしょ。

……そう、そう言ってくれるところちも助かるよ。

じゃあ、そろそろ僕は行くよ。まだまだ会社が奮ってないからね、あと少しで上手くいきそうだからもう一頑張りしないと。

辛くないのか、て？

確かにちよつと疲れる事は多いけれど、今は楽しいからね。それにフランスだと僕ちよつとした有名人なんだ。悪い父や母に虐げられた娘が復讐に正義を示すって。はは、ちよつとした英雄譚みたいなことになってるんだよ。だから応援してくれる人もいるし、全然辛くない。

君は、今度はどこに向かうのかな？

デュノア社社長 シャルロット・デュノア（後書き）

シャルのイメージは少し計算高い女の子ってところ。

ドイツ軍IS配備特殊部隊隊長　ラウラ・ボーデヴィツヒ大佐

……珍しい顔だな。我がドイツ軍に何のようだ。

師匠のことについて、か？　ふむ、確かに教える事はやぶさかではない。お前と私の仲だしな。

だが、メリットが見当たらんな。……意地悪ではない、等価交換というやつだ。お前は持っているのか、情報を聞き出すに値するものを。

……なっ、それは本当か！？　嘘だと承知しないぞ！！

本当に、そうなのか……？

はは、……そうか、あのお方は、まだ剣を握っておられるのか。

いいだろう。その情報、確かに受け取った。ならば教えてやろう、ラストサムライと呼ばれた我が師匠の事を。

では何から話すか。……私と師匠の出会いか？

なるほど、順どおりにいけば確かにわかりやすい、か。では、師匠がドイツ軍にいた話でもしよう。お前も聞いた事ないだろう。

そもそも師匠は日本人であり、私が所属する部隊はドイツ軍。…本来ならば縁もゆかりもない、それこそ私たちに関係性など存在しないはずだった。

しかし、師匠がドイツに借りを作った事で私たちは一筋の線で紡がれる。

師匠の兄妹であるお姉様も来るはずだったのだが、それを師匠は肩代わりする形でドイツ軍に訪れ、我が軍を教導することになったのだ。

そうして私は師匠に巡り合った。

だが、師匠は軍人ではない。私が軍人でしかないと同じように、あの人は剣士以外の何者でもなかった。

だからこそ軍行動に必要な教導を行わなかった。師匠が教導されたのは個人レベルの底上げだった。一個人としての戦闘力の増強で、軍隊戦闘ではなくあくまで戦闘という点にのみ拘り、指導を下さった。実際指令部からは再三の教導変更を申し付けられてたらしいが、

聞く耳持たずだったな。『関係ないさね』としきりに語っていたな、あの頃は。

当然部隊からも不満が噴出していた。

師匠がラストサムライであり、モンド・グロツソ初代格闘部門優勝者であろうとも、軍人としての矜持と男であるという理由で侮っていたのだ。……私は違うがな。

だが、流石師匠だった。あの方は我々を完膚なきまでに叩きのめし、己の実力を示したのだ。それが集団戦闘だろうが、ISであろうが関係なく師匠は無傷のまま完全勝利でもって我々を従えた。しかも勝利してすぐ『楽しいけど、まだ足りねえなあ』と煙草を吸い始めたんだ。

弱い者が強き者に従うのは全くの道理だ。戦場ではそれがわからんものほど死にやすい。冷静な状況把握と情報整理が出来ぬのだからな。

そのようにして師匠の教導が行われたが……地獄だったぞ。

やっていた事と言えばIS学園で師匠がお教えになっていた授業や剣術部と同じようなものだったが、こちらの場合は軍だからな、遠慮も手加減もされなかった。

……ああ、そうだ。IS学園での指導に関しては、師匠はある程度の手加減を行われていたぞ。何せ気絶者などいなかっただろう？

まあ、えぐさで言えば剣術部のほうが上だったかも知れないがな。失神するかしないか、ぎりぎりを見極めて指導されてたのだから。

我々はそれに合わせてサバイバル訓練、そして実戦戦闘を行っていた。特にサバイバル訓練ではドイツの山奥で行われるのだが、五日間以上をかけてノルマを達成しなければならず、更にそこへ師匠の襲撃が行われるのだぞ。

『油断そのものがお前達を殺すんだよな』と笑顔で仰られていたが、私たちとしては戦々恐々だ。師匠の奇襲によって何人の隊員が脱落していった事が……。

クラリッサなど師匠のご指導が行われるたびに膝を震わせながら内股でうつとりしていたぞ。妙に顔を赤くして『ショーツの換えは足りるのでしょうか』と言っていたが、あれは一体なんなのだ？

知らなくていい？ ふむ、お前が言うならそうなんだろうが、しかし部下の体調不慮を指摘するのも私の務めだと思うのだが。師匠も苦笑していたしな。

まあいい。……兎も角私が言いたい事は、IS学園に在籍していた甘ちゃん奴らと我々は質が違うと言う事だ。

我々は軍人であり、そして師匠に鍛えられた戦士だ。ISはスポーツと銘打たれているが、その実兵器以外のなにものでもない。お前が一番それをわかっているだろう。ならば軍に属して戦う我々こそ最も強かである。

……何よりも、あいつらは師匠のご指導に対し『酷い』だの『少しは遠慮して下さい』だの『女の子を泣かすなんて最低』などと戯言をほざいていた。……到底許容できるものではない。

貴様にもわかるだろう。いや、貴様だからわかるはずだ！ IS学園に入った私の失望と怒りを。何も考えていない愚かな雑魚共がISを身に纏うというのだからな。

師匠は『どうでもええじゃないか。雑魚には雑魚の戦い方がある』と仰られていたが、私は違う。今でもあの事を思うと腸が煮えくり返ってたまらない。あいつらによって師匠が汚されたと思うと、縊り殺してしまいたくなる。思わずあの時も笑ったり泣いたり出来なくしてやる所だった。雑魚は雑魚らしく無意味に口を閉ざしていればいいのだ。

そうだ。師匠の栄光を汚したものは何者でも許されるはずない。

断じてだ。

何故だ、と？

そうか。お前は知らなかったな。

それはな、当時私にとって師匠だけがたった一人の味方だったからだ。

……この左眼はな、擬似ハイパーセンサー仕様のIS用補佐ノマシンだ。本来ならば何らリスクもなく施術できるはずのものだったが、これによって私は大きく訓練を遅れる結果となり、一時は出来損ないと呼ばれていた。

想像できない、か。しかし、昔はそうだったのだ。

当時私にとってそれは屈辱だった。

軍人として生まれ育ったのに、実力が伴わなかったのだからな。だが、それ以上に絶望を感じていた。部隊からは孤立し、実力もない私にとって存在する理由は皆無だったのだ。

……だがな、そんな私を救ってくれたのがあのお方だ。

『昔の俺みたいなの、お前』と言いながら、師匠は特別目をかけられてくださり、遅れた訓練を取り戻すためにご指導を毎日していた。

苦しかったが、その分だけ私は強くなり、隊員との実力を埋めることが出来、やがて部隊一の実力を得る事が出来た。師匠には感謝しても仕切れない。『俺はなんもしてねえよ。ラウラが勝手に強くなったんさ』と仰っていたがそれは違う。あのお方がいなければ私はあのまま腐敗していき、おそらく軍からいられなくなっていたはずだ。だから私は師匠に感謝している。それは今も変わらずにだ。

指導の内容か？ 特段珍しい事はしていない。ただ師匠の襲撃応戦を繰り返していただけ。一年以上な。

師匠の襲撃は時や場所を選ばなかったな。食事、睡眠、訓練時やIS装着時。いたる場所と時間に師匠は私を襲い、戦わなければならなかった。無論、私が師匠に敵うはずもなく、私はいつも気絶させられていたな。しかも師匠は待機状態の『灰鶴』を使用していたからな、何度斬りつけられた事か。

だが、師匠のおかげで私は救われたのだ。だからこそ師匠を侮る奴らなど許せはしない。

……そういえば、あのお方を師匠と呼ぶようになったのも、その頃からだっとな。

最初クラリッサから言われて『パパ』と呼ばうとしていたのだが、『それは良いけど駄目だ』と師匠から言われたな。ふむ、……何故だろうな。クラリッサは『恥ずかしがっているのですよ』と言っていたがな。……本当にそうだったら、嬉しいな。

だからこそ、IS学園での日々は苦痛だった。兵器を兵器と思わぬ弱者共が群れた巢窟なのだ。私も始めは何故あのような場所に師匠がおられるのか、理解できなかった。

まあ、その中にもマシなやつはいたがな。剣術部を筆頭にした極僅かな人間だけがISを駆るに相応しい奴らだった。

ああ、一夏や鈴、それにセシリアや箒、シャルがそうだった。他にも剣術部に在籍していた生徒や、師匠の授業を選択した人間だけがマシな存在だった。一度実力を見てやろうと乗り込んでいったが、なかなか手ごわかったな。……まあ師匠の一番弟子である私には敵わなかったがなっ！

しかし、私はお姉さまには敗北をしてしまった。負けることなど許されないというのに。

現役を引退したとは言え、お姉さまはブリュンヒルデ。さらに師匠の妹であられるのだから、当然の事と言えるかも知れない。

だがな、私はあの二人。織斑千冬と織斑一夏を認めるわけにはいかなかったのだ。

師匠の左目に入った傷跡は二人が原因でつけられたようなもの。その結果師匠はモンド・グロツソを棄権するはめになり、あまつさえ現役を引退するに至ったのだぞ。弟子として師匠の栄光を汚した敵は討たなければならん。……その時は本気でそう信じていた。

それに、師匠はあの二人と鈴にだけは私の知る強いままの師匠であってくれない。私は家族と言うものを理解できないし、師匠の弱さを見たくなかった。私を救い、導いて下さった師匠は誰よりも強く雄々しい剣士であり、弱さなどあるはずがない。

だからな、師匠の弱さなど私が切り捨ててやろうとしたのだ。

言わないでくれ、その時の自分はいかに無知だった。だからこそ知らない事は怖く、必要とさえ感じていなかったよ。

でも、私は教えられたのだ。

『春兄が意地を張らなくてもいいぐらいに強くなつてやる』と一夏に説かれ。

『私は兄さんの全てを知ってるからこそ、あの人の弱さが愛おしい。貴様もわかれ』とお姉さまに叱られ。

『万春さんの傍に立たなければいけないの。だからあんななんかに負ける理由がないわ』と鈴に頭を叩かれた。

皆強くなろうとしていた。

そう、皆最初は弱かったのだ。自らの弱さに出会い、そして弱いままだと嫌だから、強くなろうとしていた。気づかされたよ、私も同じだったのだと。

ただ私は私の知る、私だけの師匠であつて欲しかった。師匠じゃなければ、私を認めてさえくれないと師匠を求めていた。……ただ、それだけなんだ。

な、なんだその小動物を見るような目は。私をそんな目で見るんじゃない。

私はシュバルツェ・ハーゼ隊長ラウラ・ボーデヴィツヒ大佐だぞ
っ。

かつての思考はすでに淘汰されている。今の私が昔の私であるはずがないのだ！

……だが、あれからだったな。私も随分と甘くなったのは。

お姉さまをお姉さまと呼ぶようになり、師匠と揃って買い物にもいったな。臨海学校に必要なものを買に行ったのだが、一夏と合流する結果となりお姉さまの水着を見て回り、黒色の水着を選んだな。『お前にや黒がよく似合うさね』と師匠も仰っていたからだろう、お姉さまも嬉しそうに顔をにやけさせていたぞ。

私も私で水着が必要とわかりクラリツサと連絡を取り合っていたが、途中師匠が加わり色々と話したな。ただ、クラリツサは『教官の声だけでじゅくじゅくになってしまいます』と鼻息荒く言っていたが、一体何がじゅくじゅくになったのだろうか。

ああ、そうだな。初めて楽しさというものを知ったのがあの頃だった。

そう意味では毎日が新鮮に溢れていた。新しい知識、見知らぬ発見があれほど胸躍るものとさえ、それまでの私は知らなかったの

だ。だから師匠やお姉さま、それに一夏やついでに鈴たちに感謝しているさ。

だが、鈴に関してはわたしが師匠におんぶをしていただいてるのに、師匠の背中にだっこしてもらっていたのは気に喰わないが、全く。

そうだ、あいつはいつも私の邪魔をする。私はただ師匠と一緒にいたいただけなのに、『そのポジションは私のものよ!!』と言っていつも割り込んでくる。なんなんだあいつは!!

そんなあいつらがいまだは国家代表だ。確かに実力があつた事は認める、師匠のお教えを受けた中では随一の力を手に入れていたからな。ふん、我が隊は今度のモンド・グロッソでは警備を任されているからな。私怨で任務を怠る事はないが、もしかしたらなにかしらの要因で警護が出来なくなるかもしれないぞ。

昔のことじゃない、だと？ 何を言う、現在進行形の話だ！

あの意地悪めが。私が師匠に可愛がれるのはよっぽど気に喰わんと見える。だからいつまで経つても『ちつぱい』なのだ。私は違うぞ。見るがいい、この伸び上がった背丈を！ 今ではお姉さまにも引けを取らないのだ。

……しかし、そうか。安否が知れたならば問題はない。

あのお方はいつだって障害を己が剣で切り開いてきたお方だ。如何な者が相手であり、幾ら卑怯な手段や策を用いようとも、きつと斬り捨ててくれるだろう。私の知っている師匠はそういうお方だ。

うん？ ……なんだ、このヌーの大群が大移動するような音は。

ああ、不味いな。クラリツサがどこからか嗅ぎ付けたか。あいつは師匠のことに關しては私以上に敏感だからな。きつとどこからか話を拾ってきたのだろう。

仕方ない、取り合えず私が抑えとく。その間にお前はもう行くといいだろう。

では、さらばだ。

……お前と会えてよかったよ。

ドイツ軍IS配備特殊部隊隊長 ラウラ・ボーデヴィツヒ大佐（後書き）

クラリッサがなぜか色物に。 どうしてこうなった。

日本代表補佐 篠ノ之箒（前書き）

やばい、寝てた。

日本代表補佐 篠ノ之箒

『ラストサムライ』とはよく言ったものだ。あの人の駆る『灰鶴』は『銀の福音』の猛攻を切り裂き容易く避けていった。まるで『灰鶴』そのものが一振りの刀剣のようだった。

しかし、本来であるならば万春さんが『銀の福音』を相手にしなくても良かったのだ。……全ては私の責任だった。

私は、浮かれていた。あの時はそうとしか言いようがない。私の未熟さが浮き彫りになり、そして自分本位な行動を行っていたのだから作戦が成功するはずもないんだ。

……何故かって？ つふ、それはな、私はあの時自分の力を見せ付けるために動いていたからだよ。

確かに『銀の福音』は危険な相手であり、それが暴走状態に陥っているのだから並大抵の相手ではない事は百も承知。……だが、このように並大抵な相手と自然に考えていただけで、私は倒せると思っていたんだ。情けない話だが、本当だ。姉さんから『紅椿』を貰った直後だったから、と言う事だけが理由ではない。一夏と私なら上手くやれると根拠のない自信に満ちていたのがそうだ。

私はな、昔からそういう奴なんだ。単純で、頭が回らない。……恥ずかしい限りだ。よくそのことで万春さんには面倒をかけていた。

あの人は私の父が教えていた篠ノ之道場の門下生であり、私からすれば兄弟子にあたる人だ。万春さんは父の愛弟子みたいな方で、よく可愛がられていたよ。一夏の両親が失踪した後、万春さんに仕事を回したのは私の父だ。それほど父は万春さんを気に入っていた。だから娘である私とも面識があり、道場ではよく打ち合いをしていたが。……いや、あれは打ち合いなんてもんじゃなかったな。

万春さんの剣の腕は知っているだろう？ あのお方の剣は天衣無縫の剣だ。何者にも縛られず、目の前にある敵がなんであろうが斬り裂いてしまう。あの頃から他の門下生とは一線を画した強さを持つていて、自分より年上の相手であろうとも容易く勝利を収めていた。

幼かった私はそれに憧れて、よく試合を挑んでいたが遊ばれてお終いだっとな。あの人からしてみればただのじゃれ合いにしかならず、『おっと今のはよかったぞ』と私の打ち込みは雲を切るように見切られ流されていた。まあ、たまに竹刀で受け止めてくれる事もあったが、そこまでだ。ことごとく相手にならなかったよ。

大人と子供という差もあるだろう。何せ万春さんは私より十歳も上で、その時には体つきも出来ていた。対して私はまだまだ子供で、女だったから同い年の男どもと比べれば発育も良いほうだったが、それでも雲泥の差だ。いいようにあしらわれていたよ。

しかも私はそれを気にして相手にぶつけにくようなざまだ。よ

くそれをくすぐられてあっけなく負けていた。『お前はもつと相手を見なけりや駄目だなあ』と教えられていたが、それを私は結局理解できていなかったんだ。そしてずっと理解せぬままにしていた。

だからな、万春さんでは相手にさえしてくれなかったから、一夏とよく打ち合っていた。一夏もなかなかその頃は強くてな、私と噛み合うようだったよ。

だが、そんな日々が急に変わっていった。

姉さんがISを作り上げてから、私たちの周りは大きく動いていた。った。

姉さんは、……なんだろうな、よくわからない人だった。頭が滅法良くて私には理解できないものを理解して、私には見えないものを見ていた。所謂天才と呼ばれる人間だった。

だがな、あの人は何か人として致命的なものがごっそりと欠けていた。世に生まれた天才とは大抵異常者とされていたが、姉さんはそういう意味では正に真性の異常者だった。私は子供ながらに不気味でしうがなかったよ。

今では、……どうなんだろうな。はは、今でも私は姉さんを理解出来てないんだ。

ただ姉さんは万春さんや千冬さんには仲が良かったな。私や一夏もまあ気に入っていたらしいが、二人の場合はそれ以上だった気がするよ。

そんな姉さんが作り上げたISによって世界は変わり、そして私たちもそれに飲み込まれそうになった。姉さんが行方不明になった後、ある時政府の人間が来て、私たちを守るためと言いながらバラバラに暮らす事を強いてきた。……あれはそう言っていたが、その実私たちを人質に取り姉さんの居所を掴もうとしていたんだろう。その時にはわからなかったが、ただ怖かった。

だけどな、そんな私たちを助けてくれたのが万春さんだ。『俺は恩は返す人間だしな』と言いながら政府の人間を返り討ちにした。

すこかったぞ、私は人が空を飛ぶ瞬間を始めてみたな。

そして政府が力ずくに出ると、万春さんは容赦をやめた。拳銃の弾丸を切り裂き、滅多打ちにした。たぶんあの時が初めてかもしれないな、人の暴力がどのようなものか理解したのは。権力と暴力によつて私たちへと襲い掛かる政府の人間と、それを純粋な暴力によつて斬り捨てる万春さん。それらがぶつかり合つて、片方が倒れていく。

……そうしている内に万春さんがISを纏った。政府の人間は啞然としていたな。何せ、ISは女性しか使用する事ができないと正式な発表が行われた後だからな。たぶん万春さんはそれを知っててわざと見せ付けるようにISを使用したのだ。……私たちを守るために。

普通抵抗を行えばただではすまない。国家とは、世界とはそういうものだ。

だが、万春さんはそれと真っ向から戦い、斬り捨て出し抜いていた。男でISを操縦できるという価値を利用して条件を飲ませ、私たちは一家離散の危機を脱した。しかし、そのせいで万春さんは更なる戦いの中に入り込まなければならなかった。

ああ、そんな心配必要ないんだ。万春さんは戦いを求めているのだからな。

ただ己の剣のみでどこまでいけるかを求め、そしてそれはISを相手であるうとも関係なかった。ひたすらに真剣勝負を望み、そこでの勝ち負けに拘り続けていたのだから。

だけどな、そんな事当時の私は知らなかった。親しい人がよくわからない流れに巻き込まれていったと、なんとなくそれだけは理解していた。

だからこそ、私は姉さんを恨んだ。

まるで他人など興味もなく振舞い続け、その結果家族がどうなるかも気にせず、万春さんがとんでもない事になっても知らぬ顔だ。……正直、なんであんな人が自分の家族なんだと、その時は本気で思いもした。

兎も角、そんな訳で私たち家族は万春さんには感謝しても仕切れぬ恩を与えられてしまった。『元から俺が貰ってたもんを返しただけさね』と万春さんは笑いながら言っていたが、決してそれは釣り合っていないだろう。だから、私はあの人に受けた恩を返したかった。

だが、それから万春さんは忙しくなって全然会う事が出来なくなってしまった。『世界唯一の男性IS操縦者』だからな。ほとんど家に帰ることも出来ず、テレビの向こう側の住人となっていた。

残された一夏や千冬さんは寂しそうだったよ。特にモンド・グロツソの時にはお二人とも出場するため海外へと向かわなければならなかったのだから、一夏だけが残される事になり私の家に預けられる事になったが、……普通じゃないだろう。未だ幼い子供が一人残されるなど。

私は何故だろうと必死に考えたさ。変わらない日々が来ると当た

り前のように信じていたのに、何もかもが目まぐるしく変動していたのは一体どうしてなんだと。そして全ての現況は一体なんだと考えた時、それは一目瞭然だった。

どれもこれも全て姉さんが原因だ。

そう考えるようになってからはもう止まらなかった。

私はIS学園に入らなければならず、一夏がISを動かせるとわかって強制入学を受けなければならなかったのも、全部姉さんのせいなんだ。恨みは怒りに変わり、そして遂には憎しみにさえ成り果てようとしていた。……そんな自分は嫌だったよ。あまりに醜く、なんて汚い存在なんだとな。

だから必死に剣道へと打ち込んでいた。剣を奮っている時だけは余計な事は考えずにすむと思いつながら。

しかし、私の剣はいつのまにか濁っていたんだ。

あれはいつだったかな。……そうだ、確か一夏がセシリアとの決闘を行うための実力を測るため、剣道場で打ち合っていた時の事だ。

そこに万春さんが現われて『久々に見てみるかね』と私に稽古を

つけてくれたんだ。……そういえばそこで初めて私はIS学園に万春さんが勤めているのを知ったな。いや、偶に帰ってきている事は知っていたが、千冬さんと異なり殆ど会う事も出来なかったからな。

私は万春さんに己の剣を見せるために全力で挑んだ。

勝負に余力を残す事は重要だが、あの時は正真正銘の全力だった。

しかし万春さんはあっけなく私を打ち倒し、つまらなそうな顔で『迷いを斬るならまだしも迷いで斬ろうとしてんだから、そりゃ鈍らになるな』と言われた。

愕然としたよ。万春さんは剣士だ、だからこそ私の剣なんてお見通しだったんだ。私が自分の鬱憤を晴らすために剣を握っているとな。

そして私は万春さんに失望されたと思った。当然だろう、昔から面倒を見ていた奴が邪念でもって剣を奮っていると気づいたのだから。

でもな『よかったな。取り返しのつかない事にならなくてさ』と万春さんは私を許し、『これから治していこうか』と稽古をしてくれるようになったよ。あの人は私の剣を見捨てるなどせず、真摯に私を導いてくれたんだ。

だから私は万春さんの期待に応えたかった。師匠とも呼べるあの人の期待に。

だが、結局私は変わらないままだったんだ。

……臨海学校で『銀の福音』を迎え撃たなければならなくなつたとき、私は有頂天になっていた。姉さんが作つた『紅椿』は第四世代のIS。まず負けるはずはなく、私と一夏ならば打破できると浮かれてしまし、結果敗北した。作戦領域内にいた密漁船を見捨てようとして……私が至らないばかりに一夏が撃墜するという結末を迎えてしまったのだ。

酷い話だろう。己の未熟さが一夏を危険にさらしたんだ。

……ああ、本当にそう思うよ。あまりに私は愚かだった。

私は剣士であろうとも、戦士ではなかった。剣を揮う事は出来ても、戦いのなんたるかを理解せずあの様だ。一方的な勝利などありはせず、いつだって命の両天秤は均一だ。どちらかが傾き、片方が浮き上がる。

だから私はもう一夏にも、万春さんにもあわせる顔なんてなかった。

た。あの人の教えを結局理解できず、結果一夏を命の危機にさらしたのだから。

でもな、鈴に怒られたよ。子供のようにぐずぐず泣いていた私に向かつて『泣いてるなら誰でもできる。だけど泣いてる暇があったら戦いなさい。前を向かない奴に勝利なんてないんだからね』と。

鈴は私とは大違いだ。万春さんを真っ直ぐに追いかけて戦いの中へと飛び込んだあいつは強くて、……羨ましかった。そうだ、私は鈴が羨ましかったんだ。誰よりも強い万春さんの傍にいくため、好きな人の助けになりたいためにふり構わず向かっていく。あんなに鈴は気高く強い。私と違ってな。

けれど状況は待ってくれない。私がまごついている合間に万春さんが出撃してしまっただ。皆の制止を気にも留めずに行ってしまったらしい。

私たちが『銀の福音』へと向かうとすでに戦いは始まっていた。

……嵐が訪れたかと思ったよ。『銀の福音』が繰り出す攻撃に空の色さえ変わろうとしていたんだ。それほどまでに激しい銃撃が行われていた。

その中に万春さんはいた。『灰鶴』は浮遊しないままにな。弾雨の嵐の中、『灰鶴』は空を飛翔し、着地をして蹴り上げていたんだ。

あれは『灰鶴』の単一仕様能力『臈』によるものだ。

『朧』は『灰鶴』にのみ触れる事が許された壁を任意に展開する能力であり、その壁を接着面として使用することによって『灰鶴』はどのような場所であろうとも三次元機動を可能としている。

無論、例えば空の上であろうとも足場を作り上げるのだ。

それによって万春さんの剣は地上にいる時と同じような冴えを見せられる。

そもそもIS装着時と生身で剣を振る場合、ある点に変化がある。剣を揮う際に用いられる要素は肉体と重力、そして地面だ。

それらが複合されることにより剣は剣としての切れ味と重みを持つことができる。

ISにはそれが無い。PICによって重力から離れ更に足場さえない空中上で剣を振るのは、生身との圧倒的な差が生じるという事だ。

しかし万春さんが駆る『灰鶴』はそれが無い。あの人にとっては地上であろうが空中であろうが関係なく、『絶景』を揮うことができるのだ。

……正直、圧倒的過ぎて言葉にできない。あの時あの場所にいた私たちは呆然とその戦いを見ていた。……見とれていた。

まるで万春さんのために用意されたような独壇場が私たちの目の前にあったんだ。『灰鶴』は一発でも当たれば機能停止に追いやられる際物だ。そのような状態で『銀の福音』が撃ちだす弾雨の中で万春さんは縦横無尽に立ち回っていた。しかも絶対防御すら機能させていないのだぞ。まともな神経をしていたら、そのような戦闘に精神が耐えられるはずがない。

だが、そんな中にいるというのに、万春さんは笑っていたんだ。

それは私たちが攻撃に加わり『銀の福音』が第二形態となってもそれは変わらなかった。むしろ更に笑っていた。『これは楽しいじゃないかい。そうじゃなきゃ斬りがいない』と嬉しそうにな。

あの時、私は怖気を感じた。結局その後なぜか回復しきった一夏が駆けつけ万春さんと共に『銀の福音』を撃破したが、それでもあの感じは私の中から消えなかった。だが、『体は十全かいもうちよつと寝とけりや良かったのにの』と一夏を心配する万春さんを見てそれも気のせいだろうと私は無視した。

……今でもたまに思うんだ。

もしあの時はつきりとあの笑みの意味を万春さんに聞いていれば、あの人が私たちの前からいなくなる事もなかったんじゃないのか、とな。

すでに過ぎた事だ。過去は幾ら鑑みても変わる事はない。しかし、それでも私は思わずにはいられないんだ。皆で過ごしたあの日々が楽しかっただけに、余計にな。

そして私が何故あの人の笑みに恐れを抱いたか、あの人が突然いなくなってからようやく気づいたんだ。

万春さんの笑顔は、どこか姉さんに似ていたんだよ。

……これで私が話せることは全部だ。あとは一夏にでも聞くがい。

たぶん今頃は剣道場にいるんじゃないか。今度のモンド・グロツソには気合が入っているからな、あいつ。

ああ、そういえばどうして日本代表補佐になったか話してなかったな、そう言えば。

い、いや。忘れてたわけじゃないぞ？　そもそもお前が日本にい

ないのが悪いんだ。うん、そうだ、そうに違いない。

……話さなくてもいい？ な、なんだその目は。私はただ一夏が
国の代表として慎重深く恥じない行動をするか見張るだけで、決し
てあいつの傍にいたかったただけだなんて事じゃないんだからな。本
当だからな！！

日本代表補佐 篠ノ之箒（後書き）

ショップの店員さんにコーヒーを一日五、六杯は飲んでるって話したら身体に悪すぎるって言われた。そうか、だから最近吐き気がすごいんだ。

日本代表 織斑一夏（前書き）

もう少しでクリスマスが終わるらしい。

日本代表 織斑一夏

お、帰ってきてたのか。おかえり。

ちょっと待つてくれよ。……よしこれで終わりだ。いや、中途半端に身体動かすとなんか気持ち悪いだろ。だからちゃんとやっておきたかったんだよ。

それで、旅はもう終わったのか？ ……そっか、もう少しだけ見て回りたいのか。まあいいんじゃないか。お前なら大丈夫だろ。

心配じゃないのかって？ どうしてだ？ お前充分強いじゃん。俺でも歯が立たないんだから心配する必要もないだろ。

あ、もしかしたらお前に襲い掛かるやつがいるかもしれないとか。そうだな、確かにそれは心配だな。相手のほうが。お前がやりすぎないかどうか俺は心配だよ。

ちょちょちょ、その握り拳はなんだおい。久しぶりに会ったのにそれはないだろ！

いてえなあ、畜生。そんな強く殴んじゃねえよ！

ったく。……でも、久々だな。こうやって誰かに殴られるの。

……おいマゾとか言うな。叩かれておいて嬉しそうとか変態、つてひでえ言い草だな。

いいじゃないか。家族のふれあいの一つとも思ってくれよ。最近は千冬姉も忙しいし、お前もお前でふらふらとあっちこっちに行ってるもんだから、家が淋しくてしょうがねえんだからよ。

それで、何が聞きたいんだ？

なんだ、その顔。びつくりする事ないだろ。俺はな、何となくだけどお前が何を聞きたがつてるかわかるぞ。……言ってるうか、春兄しゅんけいのことだろ？

やっぱりな。お前はそういう顔をしてた。すごいか、エスパーみたいだろ俺。

……そんな冷めた目で見るなよ。結構傷つくぞ、それは。

まあいいや。それで春兄の事だな。そういや、お前春兄の事あんまり知らないもんな。お前が来た時には、もう春兄はどこかに消え

ちまつてたし……。

けどそつだな、なに話そうか。

ん？　なんで春兄って呼んでるかって？

ああ、春兄は万春って名前だけどさ、万春兄って何か言いづらいだろ？　語呂が悪いというか、千冬姉は言いやすいんだけどな。それで千冬姉からの提案で春兄って呼ぶことにしたんだ。初めて呼んだときは『ほお、なかなか良い仇名じゃないかい』ってさ、春兄笑いながら俺の頭撫でてくれたよ。

そんな時どんな気持ちだったかはもう覚えてないけど、たぶん嬉しかったんだと思う。春兄はよく俺と一緒にいたしな。やっぱり家族が笑ってくれたら嬉しいに決まってるんだろ。

でも懐かしいなあ。俺と千冬姉と春兄でずっといたんだよな、あの家に。

俺、両親の顔とか覚えてないけどさ、二人の顔だけは昔からずっと覚えてるんだ。春兄は二ヒルな感じだったけどいつも剣には真剣でさ、千冬姉は昔から出来る女の人って感じだったよ。まあ千冬姉、昔はあんまり料理できなかったんだ。今だって家事殆ど出来ないけれどさ、その時は料理だって駄目で家事なんて何も出来なかった

ぞ。だから俺が家事とかやるようになったんだ。

春兄？ 春兄は殆ど箸の親父さん所にいて竹刀握ってて、家にもだるそうに寝転んでばっかだったから家事なんてやんなかったよ。俺が幾ら言っても手伝ってくれなくてさあ、ほんと俺だけで家の事は全部やってたようなもんだ。

……ん？ もしかしたら春兄、千冬姉より家事出来ないんじゃないのか？

うわ、ありえそうだ。というか間違いなくそうだろ。米とかとげんのか。

でも、セシリアみたいな事はしないと思うから大丈夫だろ。……たぶん、きつと。

まあ、春兄なら料理できなくても生きていけるだろ。千冬姉だって料理できるようになったし、俺も簡単なものなら作れるしな。春兄はいつだって食べる専門だよ。

……ほんと、今なにしてんのかなあ、春兄。

そりゃ心配だろ。だって家族のことだしな。家族の事心配しなく

て、何を心配すんだよ。

まあ、心配させるほど春兄が弱かった事なんてなかったけど。

春兄はさ、すげえ人なんだ。千冬姉だつてすごい人で尊敬してるけど、春兄は俺たちのために早い頃から働いて金を稼いでたんだ。たぶん春兄が高校生ぐらいの時じゃないか？ 春兄学校には通ってなかったけど、それでもそんな十六ぐらいで家族のために働く事なんて出来ないと思うぞ。

それに剣の腕もすごくてさ、春兄に勝てる人なんて誰もいなかった。

だからさ俺、大人になったら春兄みたな人になりたいって思ってた。体張って俺たち家族のこと守ってくれたんだ。そう考えるのも仕方ないことだろ？

でもさ、春兄が『世界で唯一ISを動かせる男』になってからは大変だったんだろうな。

その頃はいつもテレビに春兄が出てたな。俺たちそれをじつと見てた。あん時は千冬姉も淋しそうだった。前もちよくちよく家に帰って来なかった時もあつたけれど、全然帰ってくることなくって

さ。たまに帰ってきててもなんでもない風にしてたけど、すごい疲れてたのはわかってた。

俺もなんとかしたかった。だけど大人の世界にいる春兄に出来ることなんてほとんどないだろ。それでも『そうやって想ってくれただけ、俺は上手くやっていけるさ』って春兄言っただ。そしたら俺ますますどうにかしたくつてさ。

確かに仕方がないことかもしれない。けどさ、それでも大事な家族がとんでもないことになってるんだから、心配ぐらいするさ。

その内、千冬姉もIS搭乗者として大人の世界に飛び込んでいった。『私がいれば、多少は兄さんも楽になる事ができるはずだ』っていいながら。

皆やるべきことを見つけて、それに向かって頑張ってた。じゃあ俺は何が出来るんだろうつて、そんな時はすごい考えてたよ。……子供が考える事じゃないよな。

けど、そんな考えも第一回モンドグロッソで春兄と千冬姉が戦ってるの見て吹っ飛んだ。

二人とも滅茶苦茶強いんだ。誰も二人に勝てなくて、決勝戦で二人が戦う事になった。誰も相手になんかなってなかったよ。本当に

圧倒して、兄妹で決勝戦だ。漫画やアニメみたいだろ。でも、実際にそうだったんだよな。

かつこよかったよ。あの二人の家族である事が自慢に思えるくらいに。

だけども、テレビの向こうで切り結んでる二人を見て思ったんだ。

俺、置いてけぼり食らってたなって。

二人ともすごい速さで走っちまって、俺はそれに全然追いついてない。どんどん二人は見えなくなって、最後には俺一人だけ残されるんだ。

……ひねくれてるとか言うな。ほんきでそう思ったんだから仕方ないだろ。

一人って淋しいだろ。特に二人とも有名人になっちまったから、いつも家には俺一人しかいなくてよ。第の家にはお邪魔してたけど、それでもどこか心がぽっかりとしてんだ。誰もいない家で自分のためだけに飯作るんだぜ。それで二人が傍にいないって思うほど、それが広がって深くなってくんだ。

だからさ俺、まずはあの二人に追いつく事から始めようと思ったんだ。世界最強の兄と姉の場所まで行こうって決めたんだよ。

もつと俺がしっかりしてれば、そうは考えなかったかもしれない。もし二人のどちらかがいなかったら仕方のない事だって納得がいくかもしれない。

だけだよ、春兄を追っ掛けて千冬姉は行っちゃった。それで俺だけが残ってたんだ。……納得いかないだろ。せめて春兄が千冬姉、どっちかがいてくれれば良かったのに。

俺、簪の気持ちが分からなくもないんだよ。簪は先輩に嫉妬して先輩がすごければすごいほど自分が惨めに思ってた。俺ももしかしたら、そうなってたかもしれないからな。でもさ、俺って負けず嫌いだから二人に追いつきたいって思ったんだ。

けど俺が誘拐されて、それが原因で二人が現役止めたときは参ったよ。俺のせいで二人ともES止めちまって、しかも春兄は左目が見えなくなっちゃった。なんて駄目な奴なんだろう、いつそ死んでしまえばよかったんじゃないかって思わず言っちゃった。

……そしたら千冬姉にすげえ怒られた。あれだけ怒った千冬姉は今でも見た事がないな。

『ふざけるなよ。お前が死んでしまったら、残された私たちはどうすればいいんだ！』って泣きながら言われて、春兄には『俺はお前が家族でよかったって思ってるけれど、お前は違うのかい？』って言われたよ。

情けねえよ。家族心配させて、それで怒らせてさ。結局そんな時は自分の事しか頭になくて、二人がどんな気持ちかだったかなんて俺全然考えてなかった。でもよ、二人が俺の事すごい大事にしてくれてるってわかったから、結構楽になったよ。

だからさ、俺は二人を守れるぐらいに強くなろうって決めたんだ。

……それが最初の俺の誓いってやつかな。

今思えば、たぶんきつとそうなんだろうな。

はは、そうだよな。あの二人を守れるぐらいに強くなるって、土台無理な事かもな。けど、最初から諦めてたらきつと何も出来ないだろ。

それにもう決めちまったんだ、あの時に。二人を守れて、俺の事を誇りに思えるくらい強くなってやろうってさ。

そういう意味じゃ、俺もISが動かせる事が出来るってわかってよかったよ。千冬姉は心配してて、俺も最初は戸惑ってばっかだった。でも、ISが動かせられるんだったらあの時の誓いを果たせるんじゃないかって考えたんだ。だから、その時やつと俺はスタートラインに立っただよ。

……ん、あれ？ いつの間にか俺の話になってた？

うお、今掠った、掠ったぞ！？

お前の話なんか聞きたくない、って冷たいなあ。

ああ、わかった、わかったから！ だからその右手を下ろせ！

……それじゃ春兄の話に戻すぞ。

でも、そうだな、お前は春兄の何が聞きたいんだ？

俺が知ってる春兄のことだけでいい？

ほんとにそうなのか？

……まあ、今はそれでいいのかもな。

さっきも言ってたけど、春兄ってあんま家にいなかったんだよね。それよか剣ばつか握ってて、いつも戦ってばかりいた。組み手で、稽古で、喧嘩で。なんか餓えた鷲みたいにあつちこつちに行っては戦ってたよ。ISに乗ってもそれは変わらなかったな。寧ろ『世界で始めてISを動かした男』ってやつを利用して世界中に飛んで戦ってたから酷くなってたかもしれない。

だけど俺たちの事は大切にしてくれてたんだ。少なくとも俺や千冬姉はそう思ってた。俺たち家族は大丈夫だ。何も問題にならないし、誰もいなくならないってな。

……あれは確か『銀の福音』を倒した後だったかな。春兄が砂浜にいて煙草吸ってたんだ。俺も一緒にいた。二人で俺たちは同じ風景を眺めてたんだよ。

そしたらさ、春兄が言ってたんだ。『強くなつたな、一夏』てさ。俺は嬉しかったよ。だって春兄たちに認められるくらい強くなるって思ってたからさ。

でも俺が強くなったのは皆がいたからだ。皆がいたから俺は強くなったんだ。そう言ったらさ春兄が頭撫でてくれてよ、『じゃあ、お前がいれば皆大丈夫だの』って笑ってたんだ。淋しそうな顔でさ。

俺、なんだか嫌な予感がしたんだ。なんかもやもやって感じが胸の中に入ってきて、それが消えてくれないんだよ。

……今思うと、春兄が言ってた皆の中に春兄は入ってたのかなあ。

たぶんそれが始まりだったんだ。

夏休みに入っただけいつも通りが戻ってきたって思ったけれど、春兄は前よりも剣にのめり込んで何にも興味なかったな。いつも行ってた簾の家の夏祭りにも行かないで、ずっと剣を振ってたさ。簾の親父さんと打ち合いばかりしてた気がするよ。柳韻さんは春兄の師匠で、一人だけ春兄とまともに組み手が出来る人なんだ。夏祭りとか簾の事とか関係ない感じで打ち込んでるから、俺もあんま話することが出来なくてさ。話しかけても『ああ、大丈夫だよ。やる事があるから、もつと強くないといけないしの』ってまともに取り合ってくれなかったんだ。

……まだ強くなるうってしてるんだ。あれだけ春兄は強いのに、まだ上を目指してるって言うってたんだよ。一体どこまで行こうとしてるのか、俺にはわからなかったよ。

でも、あの時ちゃんと理由を聞けばよかったんだ。

文化祭の時さ。亡国機構のエンジニアントに襲われた時だよ。先輩が色々と考えてやってきた奴だったんだけど、……そいつがさ、昔俺を誘拐した奴だったんだ。

もう目の前が真っ赤になったよ。そいつがいなけりや春兄や千冬姉が現役やめなくて済んだし、春兄も左目が見えなくなるようなこともなかったんだぞ。しかもその時は白式奪われて、もう頭の中が何も考えられなくなっちゃった。もう俺は何も出来なくて、あの時の仕返しすら出来なくてすげえ悔しかった。

そしたらさ、そこに春兄が来たんだ。『一夏、戦いに憎しみを持ち込んであいつにさね』って言いながら。

でよ、それまで戦ってたエンジニアントが春兄を見て、すげえ顔で笑ったんだ。『戦う理由は見つかったか、てめえ』って睨みつけながらだ。

ああ、オータムって言うんだっけあいつ。

そう。俺たち家族の敵、春兄の左目を奪った奴。

そして、純粹に春兄と戦える唯一の相手。

……気づけば二人は戦ってた。俺なんか放っておいてさ。相手も俺の事狙ってたはずなのに、春兄に真っ直ぐに向かって行つたよ。

だから思つたんだ。俺はまだ全然追いついてないんだつてな。

実はさ、『銀の福音』を倒してから少しだけ自信がついてたんだ。俺はここまで強くなった、あと少しで春兄たちのいる場所に届くつて。

でも、俺は勘違いしてた。少しも追いついてないんだ。相変わらず俺は春兄の後を走ってる。背中を追い続けている。

全く、ついてく奴の苦勞なんてお構いなしだよ。ほんとに。

あの頃はいろんな人が春兄を見てた。戦つたびに見る奴が増えてたなあ。

他の生徒も、専用機持ちまでもだ。皆春兄の姿を目に焼き付けようとしてた。

俺も、もう少し見ていたかった。

……俺はまだ走り続けてる。春兄の場所にたどり着くために。

だからさ、モンド・グロッソだって足がかりにしかない。

なりふり構ってなんかいられないんだ。少しでも気を抜くとあつという間に遠くへ行っちまう。
そういう人なんだ、春兄は。

……ま、仕方ねえさ。憧れちまったんだ。

意地があるんだよ、男の子にはな。

日本代表 織斑一夏（後書き）

スクライド一夏。

吐き気がこないなあ。胃薬最強説

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7546z/>

デスティニーな兄

2011年12月25日22時52分発行